



CLUSTERPRO X 5.0

Microsoft Azure 向け HA クラスタ 構築ガイド (Windows)

リリース 3

日本電気株式会社

2023 年 02 月 17 日

目次:

第 1 章	はじめに	1
1.1	対象読者と目的	1
1.2	適用範囲	2
1.3	本書の構成	3
1.4	CLUSTERPRO マニュアル体系	4
1.5	本書の表記規則	5
1.6	最新情報の入手先	7
第 2 章	概要	9
2.1	機能概要	9
2.2	基本構成	12
2.3	ネットワークパーティション解決	21
2.4	オンプレミスと Microsoft Azure の違い	23
第 3 章	動作環境	29
第 4 章	構築手順 (Azure DNS を使用した HA クラスタの場合)	31
4.1	構築例について	31
4.2	Microsoft Azure の設定	36
4.3	インスタンスの設定	37
4.4	CLUSTERPRO の設定	40
4.5	動作確認	61
第 5 章	構築手順 (パブリックロードバランサーを使用した HA クラスタの場合)	63
5.1	構築例について	63
5.2	Microsoft Azure の設定	69
5.3	インスタンスの設定	71
5.4	CLUSTERPRO の設定	72
5.5	動作確認	94
第 6 章	構築手順 (内部ロードバランサーを使用した HA クラスタの場合)	95
6.1	構築例について	95
6.2	Microsoft Azure の設定	99
6.3	インスタンスの設定	101

6.4	CLUSTERPRO の設定	102
6.5	動作確認	113
第 7 章	エラーメッセージ一覧	115
第 8 章	注意事項	117
第 9 章	免責・法的通知	119
9.1	免責事項	119
9.2	商標情報	120
第 10 章	改版履歴	121

第 1 章

はじめに

1.1 対象読者と目的

本書は、クラスタシステムに関して、システムを構築する管理者、およびユーザサポートを行うシステムエンジニア、保守員を対象にしています。

ここでご紹介するソフトウェアや設定例は、あくまで参考情報としてご提供するものであり、各ソフトウェアの動作保証を行うものではありません。

1.2 適用範囲

動作環境については「スタートアップガイド」-「CLUSTERPRO の動作環境」を参照してください。

本書に記載した各製品・サービスのスクリーンショット等は執筆時点のものであり、それ以降に変更されている可能性があります。最新の情報はそれぞれの **Web** サイトやマニュアルを参照してください。

1.3 本書の構成

- 「2. 概要」: 機能の概要について説明します。
- 「3. 動作環境」: 本機能の動作確認済み環境を説明します。
- 「4. 構築手順 (Azure DNS を使用した HA クラスタの場合)」: Azure DNS を使用した HA クラスタの構築手順について説明します。
- 「5. 構築手順 (パブリックロードバランサーを使用した HA クラスタの場合)」: インターネットに接続するパブリックロードバランサーを使用した HA クラスタの構築手順について説明します。
- 「6. 構築手順 (内部ロードバランサーを使用した HA クラスタの場合)」: 内部ロードバランサーを使用した HA クラスタの構築手順について説明します。
- 「7. エラーメッセージ一覧」: エラーメッセージと対処について説明します。
- 「8. 注意事項」: 構築時、運用時の注意事項について説明します。

1.4 CLUSTERPRO マニュアル体系

CLUSTERPRO のマニュアルは、以下の 4 つに分類されます。各ガイドのタイトルと役割を以下に示します。

『CLUSTERPRO X スタートアップガイド』 (Getting Started Guide)

すべてのユーザを対象読者とし、製品概要、動作環境、アップデート情報、既知の問題などについて記載します。

『CLUSTERPRO X インストール&設定ガイド』 (Install and Configuration Guide)

CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの導入を行うシステムエンジニアと、クラスタシステム導入後の保守・運用を行うシステム管理者を対象読者とし、CLUSTERPRO を使用したクラスタシステム導入から運用開始前までに必須の事項について説明します。実際にクラスタシステムを導入する際の順番に則して、CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの設計方法、CLUSTERPRO のインストールと設定手順、設定後の確認、運用開始前の評価方法について説明します。

『CLUSTERPRO X リファレンスガイド』 (Reference Guide)

管理者、および CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの導入を行うシステムエンジニアを対象とし、CLUSTERPRO の運用手順、各モジュールの機能説明およびトラブルシューティング情報等を記載します。『インストール&設定ガイド』を補完する役割を持ちます。

『CLUSTERPRO X メンテナンスガイド』 (Maintenance Guide)

管理者、および CLUSTERPRO を使用したクラスタシステム導入後の保守・運用を行うシステム管理者を対象読者とし、CLUSTERPRO のメンテナンス関連情報を記載します。

1.5 本書の表記規則

本書では、注意すべき事項、重要な事項および関連情報を以下のように表記します。

注釈: この表記は、重要ではあるがデータ損失やシステムおよび機器の損傷には関連しない情報を表します。

重要: この表記は、データ損失やシステムおよび機器の損傷を回避するために必要な情報を表します。

参考:

この表記は、参照先の情報の場所を表します。

また、本書では以下の表記法を使用します。

表記	使用方法	例
[] 角カッコ	コマンド名の前後 画面に表示される語 (ダイアログボックス、メニューなど) の前後	[スタート] をクリックします。 [プロパティ] ダイアログボックス
コマンドライン中の [] 角カッコ	カッコ内の値の指定が省略可能であることを示します。	clpstat -s [-h host_name]
>	Windows ユーザが、コマンドプロンプトでコマンドを実行することを示すプロンプト	> clpstat
モノスペースフォント	パス名、コマンドライン、システムからの出力 (メッセージ、プロンプトなど)、ディレクトリ、ファイル名、関数、パラメータ	C:\Program Files
太字	ユーザが実際にコマンドラインから入力する値を示します。	以下を入力します。 > clpcl -s -a
斜体	ユーザが有効な値に置き換えて入力する項目	> ping <IP アドレス>



本書の図では、CLUSTERPRO を表すために このアイコンを使用します。

1.6 最新情報の入手先

最新の製品情報については、以下の Web サイトを参照ください。

<https://jpn.nec.com/clusterpro/>

第 2 章

概要

2.1 機能概要

本書では、Microsoft Azure のクラウド サービス上に、Azure Resource Manager を使用した CLUSTERPRO X(以下、CLUSTERPRO と記す) による HA クラスタを構築する方法を説明します。

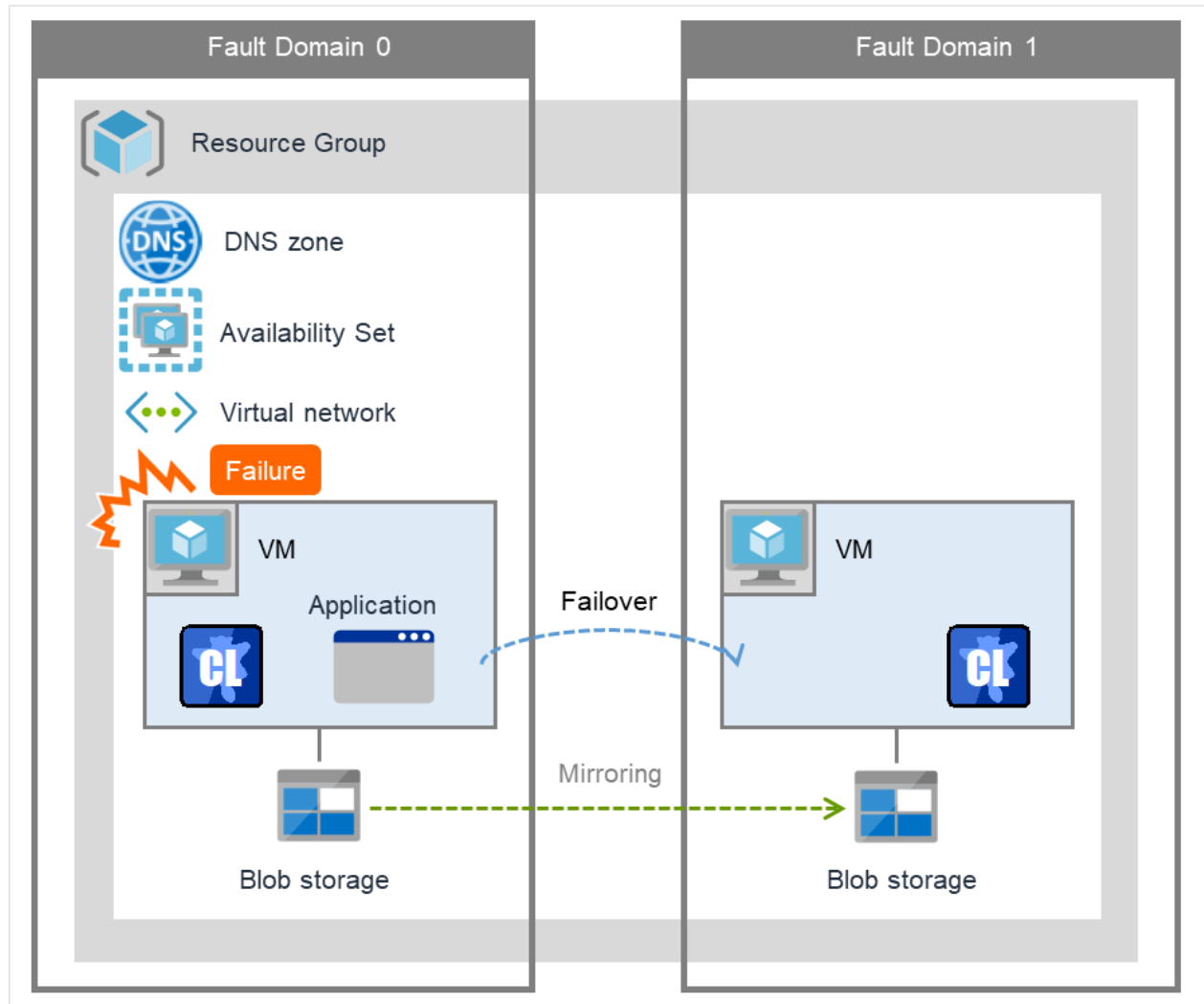


図 2.1 クラウドサービス上の HA クラスタ (Azure DNS を使用した場合)

Microsoft Azure において、Microsoft Azure リージョンや可用性セットを使用し仮想マシン (図 2.1 クラウドサービス上の HA クラスタ (Azure DNS を使用した場合) の VM) を HA クラスタ化することで、業務の可用性を高めることができます。

- Microsoft Azure リージョン

Microsoft Azure リージョンと呼ばれる物理的および論理的な単位に分割されます。

(たとえば東日本、西日本など) 1 つのリージョン内にすべてのノードを構築することも可能ですが、ネットワーク障害や自然災害などによりすべてのノードがダウンし業務を継続できなくなるおそれがあります。そこで、ノードを複数のリージョンに分散させて配置することにより、可用性を高めることができます。

- 可用性セット

Microsoft Azure では、可用性セットと呼ばれる論理的なグループに各ノードを配置できます。可用性セット内に各ノードが配置されることで、Microsoft Azure プラットフォームの計画済みメンテナンスや物理ハードウェアの障害などの計画外メンテナンスによる影響を最小限に抑えることが可能です。本書では、可用性セットを用いた構成の説明をします。

可用性セットの詳細は、以下の Web サイトを参照してください。

Azure での Windows 仮想マシンの可用性の管理:

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/azure/virtual-machines/windows/manage-availability>

2.2 基本構成

本書では、リソースマネージャデプロイモデルにおける Azure DNS を使用した HA クラスタ、リソースマネージャデプロイモデルにおけるロードバランサーを使用した HA クラスタの 2 種類の HA クラスタを想定しています (いずれも片方向スタンバイクラスタの構成)。それぞれの HA クラスタについて、選択する CLUSTERPRO のリソースは以下のとおりです。

用途	選択する CLUSTERPRO のリソース
DNS 名でクライアントからアクセスしたい場合 (Azure DNS の追加が必要)	Azure DNS リソース
仮想 IP アドレス (グローバル IP アドレス) でクライアントからアクセスしたい場合 (パブリックロードバランサーの追加が必要)	Azure プローブポートリソース
仮想 IP アドレス (プライベート IP アドレス) でクライアントからアクセスしたい場合 (内部ロードバランサーの追加が必要)	Azure プローブポートリソース
仮想 IP アドレス (プライベート IP アドレス) でクライアントからアクセス、かつクラスタ化したアプリケーションが Always On 構成の場合 (内部ロードバランサーの追加および Direct Server Return(以下、DSR と略) の設定が必要)	Azure プローブポートリソース

DSR 構成を作成する場合は以下の CLUSTERPRO オフィシャルブログを参照してください。

<https://jpn.nec.com/clusterpro/blog/20181031.html>

Azure DNS を使用した HA クラスタ

本構成では、同一の DNS 名でクラスタへアクセスできるよう、2 台の仮想マシンが同じリソース グループに属しています。DNS 名でアクセス可能とするために CLUSTERPRO の Azure DNS リソースは、Azure

DNS を使用しています。Azure DNS の詳細は以下の Web サイトを参照してください。

Azure DNS とは: <https://docs.microsoft.com/ja-jp/azure/dns/dns-overview>

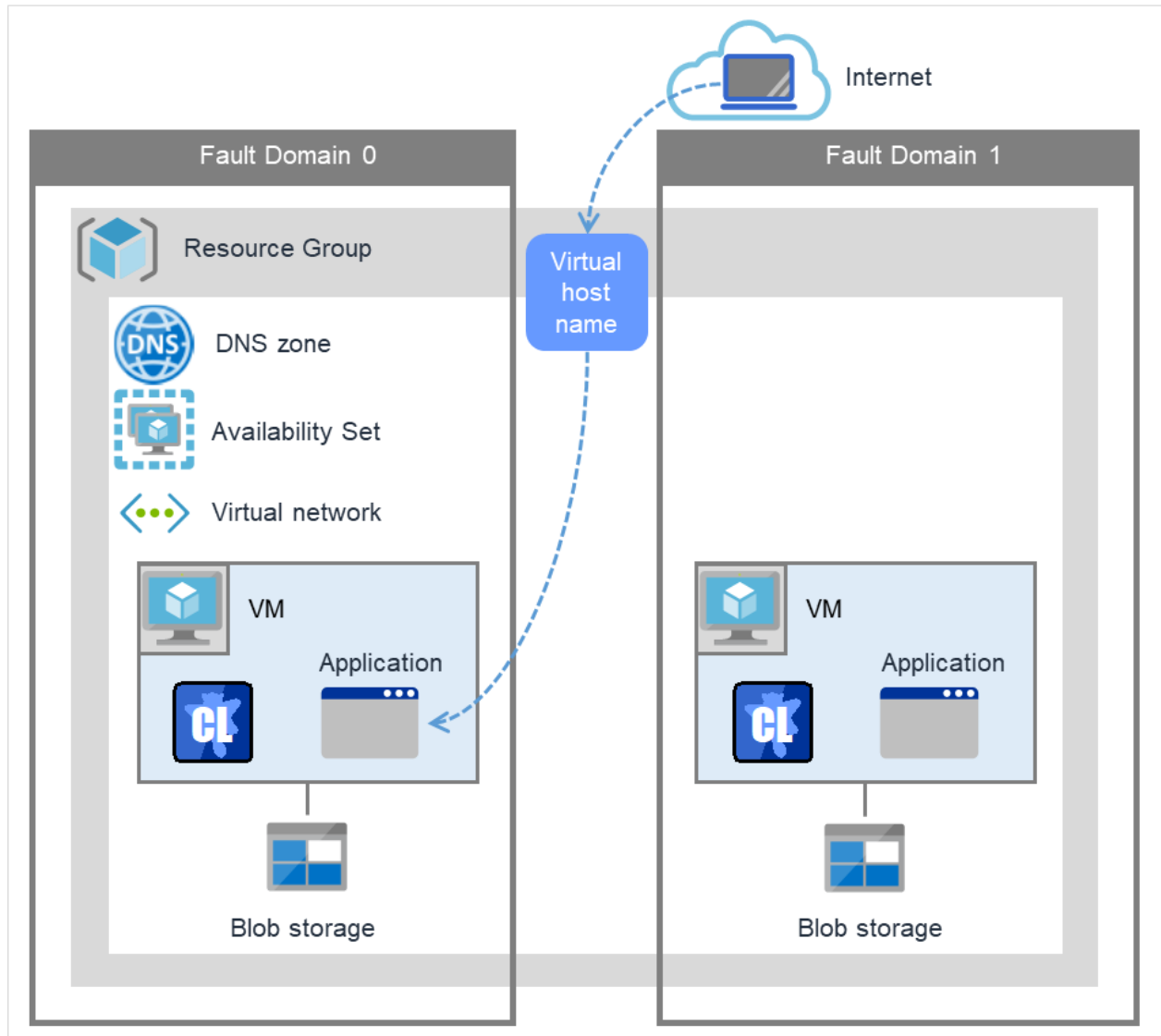


図 2.2 Azure DNS を使用した HA クラスター

また、Microsoft Azure プラットフォームの計画済みメンテナンスや物理ハードウェアの障害などの計画外メンテナンスによる影響を最小限に抑えるために、2 台の仮想マシンで同じ可用性セットを使用しています。

図 2.2 Azure DNS を使用した HA クラスターのクラスターには、Azure DNS ゾーンにおける DNS 名を指定してアクセスします。CLUSTERPRO は、DNS 名から設定した IP アドレスが得られるように Azure DNS ゾーンのレコードセットや DNS A レコードの制御を行います。フェイルオーバーまたはグループの移動が発生しても、クライアントは仮想マシンの切り替えを意識する必要がありません。

Azure DNS を使用した HA クラスター構成において必要なリソース、監視リソースは以下のとおりです。

リソース/監視リソース種別	説明	設定
Azure DNS リソース	DNS 名から設定した IP アドレスを得られるように Azure DNS のレコードセット (A レコード) の制御を行います。	必須
Azure DNS 監視リソース	Azure DNS のレコードセットに対する名前解決結果が正常であることを監視します。	必須
IP 監視リソース	Microsoft Azure の Service Management API へ疎通可能かどうかを監視し、外部ネットワークとの通信の健全性を監視します。	パブリックロードバランサーを使用する場合、かつ仮想マシンで構成されたクラスタ間の通信を監視し、内部ネットワークとの通信の健全性監視が必要な場合に必須
カスタム監視リソース	仮想マシンで構成されたクラスタ間の通信を監視し、内部ネットワークとの通信の健全性を監視します。	パブリックロードバランサーを使用する場合、かつ Microsoft Azure の Service Management API へ疎通可能かどうかを監視し、外部ネットワークとの通信の健全性監視が必要な場合に必須
マルチターゲット監視リソース	上記の IP 監視リソースとカスタム監視リソースの両方の状態を監視します。両方の監視リソースの状態が異常となった際に、ネットワークパーティション解決 (以下、NP 解決と記す) 用の処理を記載したスクリプトを実行します。	パブリックロードバランサーを使用する場合、かつ内部ネットワークと外部ネットワークとの通信の健全性監視が必要な場合に必須
その他のリソース、監視リソース	ミラーディスクなど、HA クラスタで運用するアプリケーションの構成に従います。	任意

ロードバランサーを使用した HA クラスタ

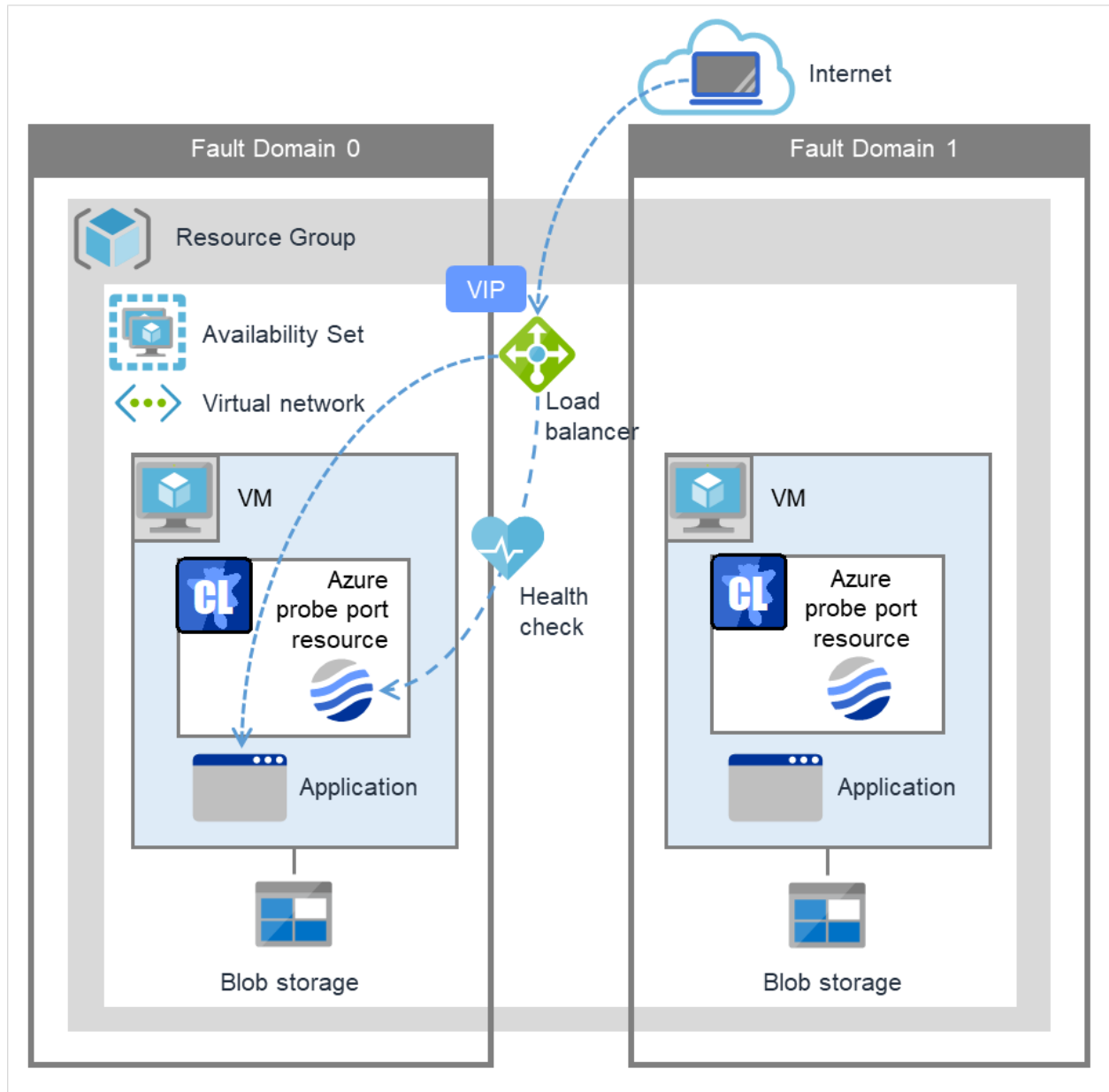


図 2.3 パブリックロードバランサーを使用した HA クラスター

クライアントアプリケーションは、Microsoft Azure 環境の可用性セット上の仮想マシンに対して、フロントエンドの IP アドレスを使用してクラスターノードに接続することができます。VIP アドレスを使用することにより、フェイルオーバーまたはグループの移動が発生しても、クライアントは仮想マシンの切り替えを意識する必要がありません。

図 2.3 パブリックロードバランサーを使用した HA クラスターの Microsoft Azure 環境上に構築したクラスターには、Microsoft Azure のロードバランサー (Load Balancer) のグローバルな IP アドレスを指定してアクセスします。

クラスターの現用系と待機系は、Microsoft Azure のロードバランサーにおけるプローブを利用して切り替えます。利用には CLUSTERPRO Azure プローブポートリソースが提供するプローブ ポートを利用します。

Azure プローブポートリソースの活性時に Microsoft Azure のロードバランサーからの死活監視 (プローブポートへのアクセス) を待ち受けるためのプローブポート制御プロセスを起動します。

Azure プローブポートリソースの非活性時には死活監視 (プローブポートへのアクセス) を待ち受けるためのプローブポート制御プロセスを停止します。

Azure プローブポートリソースでは Microsoft Azure の内部ロードバランサー (Internal Load Balancing。以下、ILB と記す) にも対応しています。内部ロードバランサーの場合、VIP は Microsoft Azure のプライベート IP アドレスとなります。

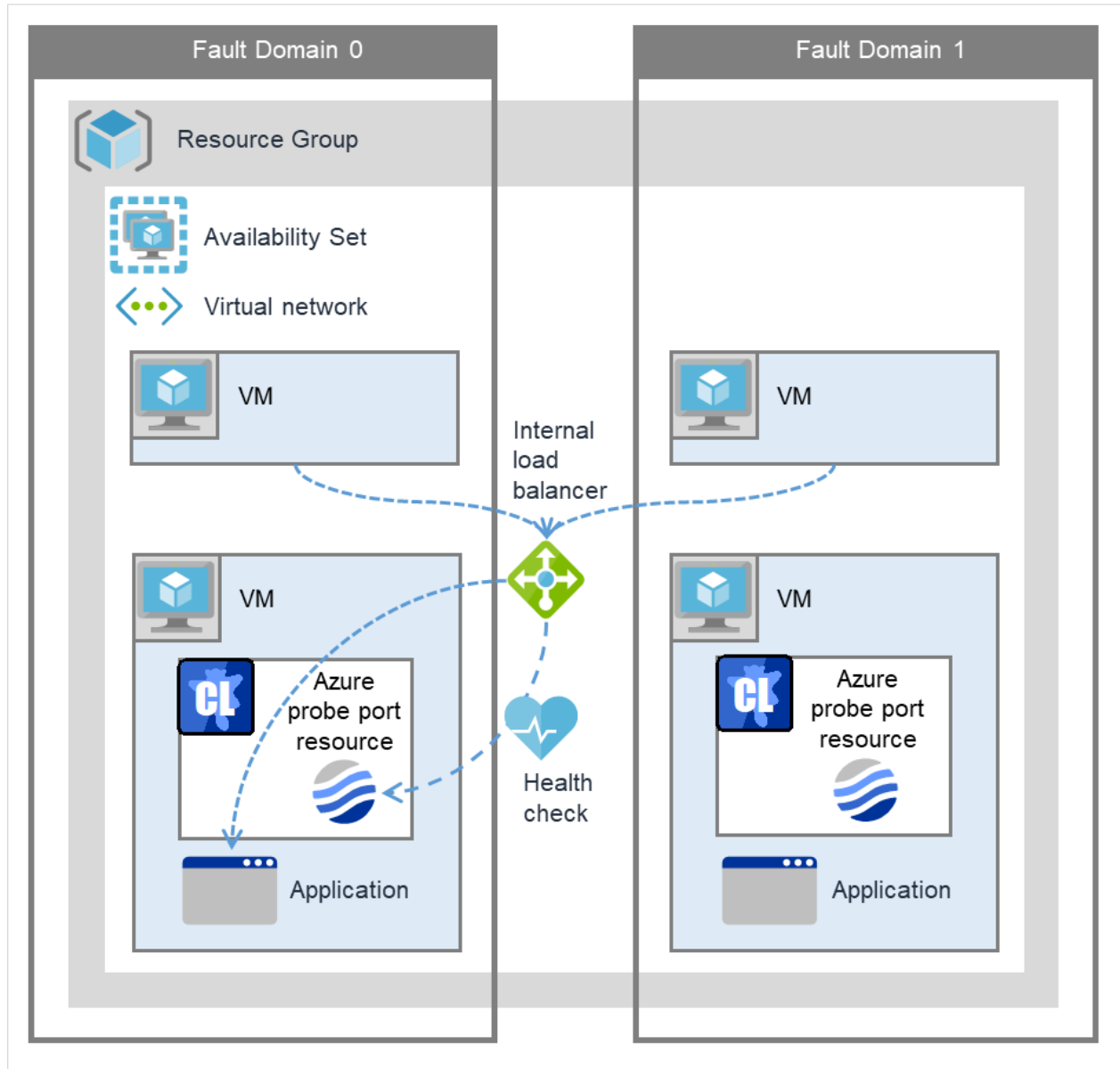


図 2.4 内部ロードバランサーを使用した HA クラスター

ロードバランサーを使用した HA クラスターの構成例としては以下の 2 種類があります。用途に応じて使用するロードバランサーを決定してください。

用途	使用するロードバランサー	構築手順
業務を Microsoft Azure のネットワークの外部に公開する場合	パブリックロードバランサー	本書「5. 構築手順 (パブリックロードバランサーを使用した HA クラスターの場合)」参照。

次のページに続く

表 2.3 – 前のページからの続き

用途	使用するロードバランサー	構築手順
業務を Microsoft Azure のネットワークの内部に公開する場合	内部ロードバランサー (ILB)	本書「6. 構築手順 (内部ロードバランサーを使用した HA クラスタの場合)」参照。

ロードバランサーを使用した HA クラスタ構成において必要なリソース、監視リソースは以下のとおりです。

リソース/監視リソース種別	説明	設定
Azure プロープポートリソース	業務が稼働するノードの特定のポートでロードバランサーからの死活監視を待ち受ける仕組みを提供します。	必須
Azure プロープポート監視リソース	Azure プロープポートリソースが起動しているノードに対して、Azure プロープポートリソース活性時に起動するプロープポート制御プロセスの死活監視を行います。	必須
Azure ロードバランス監視リソース	Azure プロープポートリソースが起動していないノードに対して、プロープポートと同じポート番号が開放されていないかを監視します。	必須
IP 監視リソース	Microsoft Azure の Service Management API へ疎通可能かどうかを監視し、外部ネットワークとの通信の健全性を監視します。	パブリックロードバランサーを使用する場合、かつ仮想マシンで構成されたクラスタ間の通信を監視し、内部ネットワークとの通信の健全性監視が必要な場合に必須
カスタム監視リソース	仮想マシンで構成されたクラスタ間の通信を監視し、内部ネットワークとの通信の健全性を監視します。	パブリックロードバランサーを使用する場合、かつ Microsoft Azure の Service Management API へ疎通可能かどうかを監視し、外部ネットワークとの通信の健全性監視が必要な場合に必須
マルチターゲット監視リソース	上記の IP 監視リソースとカスタム監視リソースの両方の状態を監視します。両方の監視リソースの状態が異常となった際に、ネットワークパーティション解決用の処理を記載したスクリプトを実行します。	パブリックロードバランサーを使用する場合、かつ内部ネットワークと外部ネットワークとの通信の健全性監視が必要な場合に必須

次のページに続く

表 2.4 – 前のページからの続き

リソース/監視リソース種別	説明	設定
PING ネットワークパーティション 解決リソース	内部ロードバランサー (ILB) を使用する 場合、Ping などの応答を返却可能な 常時稼働している装置 (以下、応 答確認先と記す) への通信可否を確認 することで、サブネット間通信の健 全性を監視します。	内部ロードバランサー (ILB) を使用する 場合、かつサブ ネット間通信の 健全性監視が必 要な場合に必須
その他のリソース、監視リソース	ミラーディスクなど、HA クラスタで 運用するアプリケーションの構成に 従います。	任意

2.3 ネットワークパーティション解決

HA クラスタを構成している仮想マシンは、お互いにハートビートによって死活監視を行っています。各仮想マシンが異なるサブネットに分散している構成においては、ハートビートが途絶えた時に、サービスの二重起動など望ましくない状態が発生します。サービスの二重起動を回避するために、他の仮想マシンがダウンしたか、自身がネットワークから孤立した状態 (ネットワークパーティション状態。以下、NP 状態と記す) かのどちらであるかを区別する必要があります。

ネットワークパーティション解決 (以下、NP 解決と記す) は、Ping などの応答を返却可能な常時稼働している装置 (応答確認先) に対して Ping や LISTEN ポート確認を行い、応答がない場合は NP 状態が発生したと判断し、設定された処理 (警告、回復処理、サーバダウン処理など) を行います。

応答確認先は、Microsoft Azure においては通常以下を使用します。

(※) 内部ロードバランサー (ILB) のプライベート IP アドレスは Ping に応答しないため、利用できません。

業務の公開範囲	応答確認先	手段	各手段のために使用する CLUSTERPRO のリソース/監視リソース/コマンド
Microsoft Azure 仮想ネットワークの外部	Microsoft Azure サービス管理 API (management.core.windows.net)	LISTEN ポート確認	・カスタム監視リソース ・ clpazure_port_checker コマンド
	各クラスタサーバ	Ping	・IP 監視リソース
Microsoft Azure 仮想ネットワークの内部	Microsoft Azure 仮想ネットワークの内部に存在する、クラスタサーバ以外のサーバ (※)	Ping	・PING ネットワークパーティション解決リソース
	Microsoft Azure 仮想ネットワークの内部に存在する Web サーバ	HTTP	・HTTP ネットワークパーティション解決リソース

NP 解決の詳細については、以下のマニュアルを参照してください。

- ・『リファレンスガイド』-「ネットワークパーティション解決リソースの詳細」

NP 解決先の設定について

クラスタシステムにアクセスするクライアントの配置やオンプレミス環境との接続条件 (専用線接続など) によって、NP 解決先や NP 解決の方法は、その都度検討する必要があります。推奨の NP 解決先や NP 解決の方法はありません。

ネットワークパーティション状態の判定をするには

指定した TCP ポートの LISTEN 状態を確認可能な `clpazure_port_checker` コマンドを提供しています。カスタム監視リソースやマルチターゲット監視リソースの [この製品で作成したスクリプト] にて使用してください。

`clpazure_port_checker` コマンドの詳細については、以下を参照してください。

TCP ポートの LISTEN 状態を確認する (`clpazure_port_checker` コマンド)

`clpazure_port_checker`

指定したサーバの TCP ポートについて、LISTEN の有無を確認します。

コマンドライン `clpazure_port_checker -h hostname -p port`

説明

本コマンドは、引数で指定されたサーバの TCP ポートについて、LISTEN の有無を確認します。

5 秒 (固定) 経過しても応答がない場合は異常と判定します (タイムアウト)。

異常の場合は、標準エラー出力にエラーメッセージを出力します。

本コマンドをカスタム監視リソースより実行することで、ネットワークパーティション状態の判定を行うことが可能です。

本コマンドを用いたネットワークパーティション解決の設定例については、「[4.4. CLUSTERPRO の設定](#)」、「[6.4. CLUSTERPRO の設定](#)」を参照してください。

オプション

-h <i>hostname</i>	判定するサーバを <i>hostname</i> で指定します (FQDN 名もしくは IP アドレス)。省略できません。
-p <i>port</i>	判定するポート番号を <i>port</i> で指定します (ポート番号もしくはサービス名)。省略できません。

戻り値

- 0 正常
- 1 異常 (通信エラー)
- 2 異常 (タイムアウト)
- 3 異常 (引数不正、内部エラー)

2.4 オンプレミスと Microsoft Azure の違い

オンプレミスと Microsoft Azure における CLUSTERPRO の機能差分は以下のとおりです。表内の ✓ は機能が使用できることを意味し、n/a は機能が使用できないことを意味します。

機能	オンプレミス	Microsoft Azure
共有ディスク型クラスタの構築可否	✓	✓
ミラーディスク型クラスタの構築可否	✓	✓
ハイブリッドディスク型クラスタの構築可否	✓	✓
フローティング IP リソースの使用可否	✓	n/a
仮想 IP リソースの使用可否	✓	n/a
Azure プローブポートリソースの使用可否	n/a	✓
Azure DNS リソースの使用可否	n/a	✓

オンプレミスと Microsoft Azure における、ミラーディスクを使用した 2 ノードクラスタの構築手順の流れは以下を参照してください。

オンプレミス環境と Microsoft Azure 環境でクラスタを構築する作業手順の違いは、事前準備として Microsoft Azure の設定が必要であることを除き、違いはありません。

• CLUSTERPRO インストール前

項番	手順	オンプレミス	Microsoft Azure
1	Microsoft Azure の設定	不要	◇ Azure DNS リソースを使用する場合 ・本書「4.2. Microsoft Azure の設定」参照 ◇パブリックロードバランサーを使用する場合 ・本書「5.2. Microsoft Azure の設定」参照 ◇内部ロードバランサーを使用する場合 ・本書「6.2. Microsoft Azure の設定」参照

次のページに続く

表 2.7 – 前のページからの続き

項番	手順	オンプレミス	Microsoft Azure
2	インスタンスの設定	不要	◇ Azure DNS リソースを使用する場合 ・本書「4.3. インスタンスの設定」参照 ◇パブリックロードバランサーを使用する場合 ・本書「5.3. インスタンスの設定」参照 ◇内部ロードバランサーを使用する場合 ・本書「6.3. インスタンスの設定」参照
3	ミラーディスクリソース用のパーティションを設定	以下を参照。 ・『インストール&設定ガイド』-「システム構成を決定する」-「ハードウェア構成後の設定」 ・『リファレンスガイド』-「ミラーディスクリソースを理解する」	オンプレミスと同様
4	OS 起動時間の調整	『インストール&設定ガイド』-「システム構成を決定する」-「ハードウェア構成後の設定」参照	オンプレミスと同様
5	ネットワーク設定の確認	『インストール&設定ガイド』-「システム構成を決定する」-「ハードウェア構成後の設定」参照	オンプレミスと同様

次のページに続く

表 2.7 – 前のページからの続き

項番	手順	オンプレミス	Microsoft Azure
6	ファイアウォールの設定を確認	『インストール&設定ガイド』-「システム構成を決定する」-「ハードウェア構成後の設定」参照	オンプレミスと同様
7	サーバの時刻を同期	『インストール&設定ガイド』-「システム構成を決定する」-「ハードウェア構成後の設定」参照	オンプレミスと同様
8	パワーセービング機能をオフ	『インストール&設定ガイド』-「システム構成を決定する」-「ハードウェア構成後の設定」参照	オンプレミスと同様
9	CLUSTERPRO のインストール	『インストール&設定ガイド』-「CLUSTERPRO をインストールする」参照	オンプレミスと同様

• CLUSTERPRO インストール後

項番	手順	オンプレミス	Microsoft Azure
10	CLUSTERPRO のライセンスを登録	『インストール&設定ガイド』-「ライセンスを登録する」参照	オンプレミスと同様
11	クラスタの作成-ハートビート方式の設定	『インストール&設定ガイド』-「クラスタ構成情報を作成する」-「クラスタ構成情報の作成手順」参照。	COM ハートビート、BMC ハートビート、ディスクハートビートは使用できません。

次のページに続く

表 2.8 – 前のページからの続き

項番	手順	オンプレミス	Microsoft Azure
12	クラスタの作成-NP 解決処理の設定	ネットワークパーティション解決リソースを使用。 以下を参照。 ・『インストール&設定ガイド』-「クラスタ構成情報を作成する」-「クラスタ構成情報の作成手順」 ・『リファレンスガイド』-「ネットワークパーティション解決リソースの詳細」	本書「4.4. <i>CLUSTERPRO</i> の設定」を参照。

次のページに続く

表 2.8 – 前のページからの続き

項番	手順	オンプレミス	Microsoft Azure
13	クラスターの作成-フェイルオーバーグループの作成、監視リソースの作成	『インストール&設定ガイド』-「クラスター構成情報を作成する」-「クラスター構成情報の作成手順」参照	オンプレミスに加え、以下を参照。 ◇ AWS DNS リソースを使用する場合 ・『リファレンスガイド』-「Azure DNS リソースを理解する」 ・『リファレンスガイド』-「Azure DNS 監視リソースを理解する」 ・本書「4.4. CLUSTERPRO の設定」 ◇ ロードバランサーを使用する場合 ・『リファレンスガイド』-「Azure プローブポートリソースを理解する」 ・『リファレンスガイド』-「Azure プローブポート監視リソースを理解する」 ・『リファレンスガイド』-「Azure ロードバランス監視リソースを理解する」 使用するロードバランサーにより以下のいずれかを参照 ・本書「5.4. CLUSTERPRO の設定」 ・本書「6.4. CLUSTERPRO の設定」

第 3 章

動作環境

以下のマニュアルを参照してください。

- 『スタートアップガイド』 - 「CLUSTERPRO の動作環境」 - 「Azure プロンプポートリソース、Azure プロンプポート監視リソース、Azure ロードバランス監視リソースの動作環境」
- 『スタートアップガイド』 - 「CLUSTERPRO の動作環境」 - 「Azure DNS リソース、Azure DNS 監視リソースの動作環境」

第 4 章

構築手順 (Azure DNS を使用した HA クラス タの場合)

4.1 構築例について

本書では、Microsoft Azure において、CLUSTERPRO を使用した 2 ノードでの片方向スタンバイクラスタの構築手順を紹介します。本手順は、node-1 を現用系サーバとしたミラーディスク型の構成を対象としています。

以下の表は既定値が存在しないパラメータ、および既定値から変更したパラメータについて記載しています。

- Microsoft Azure の設定 (node-1、node-2 で共通の設定)

設定項目	設定値
リソース グループの設定	
– 名前	TestGroup1
– リージョン	(アジア太平洋) 東日本
仮想ネットワークの設定	
– 名前	Vnet1
– アドレス空間	10.5.0.0/24
– サブネット名	Vnet1-1
– サブネットアドレス範囲	10.5.0.0/24
– リソース グループ名	TestGroup1
– 場所	(アジア太平洋) 東日本
DNS ゾーンの設定	
– 名前	cluster1.zone
– リソースグループ	TestGroup1
– レコードセット	test-record1

- Microsoft Azure の設定 (node-1、node-2 でそれぞれ設定)

設定項目	設定値	
	node-1	node-2
仮想マシンの設定		
ディスクの種類	Standard HDD	Standard HDD

次のページに続く

表 4.1 – 前のページからの続き

設定項目	設定値	
	node-1	node-2
ユーザー名	testlogin	testlogin
パスワード	PassWord_123	PassWord_123
リソース グループ名	TestGroup1	TestGroup1
地域	(アジア太平洋) 東日本	(アジア太平洋) 東日本
ネットワーク セキュリティ グループの設定		
名前	node-1-nsg	node-2-nsg
可用性セットの設定		
名前	AvailabilitySet-1	AvailabilitySet-1
更新ドメイン	5	5
障害ドメイン	2	2
診断ストレージアカウントの設定		
名前	自動生成	自動生成
レプリケーション	ローカル冗長ストレージ (LRS)	ローカル冗長ストレージ (LRS)
IP 構成の設定		
IP アドレス	10.5.0.120	10.5.0.121
ディスクの設定		
名前	node-1_DataDisk_0	node-2_DataDisk_0
ソースの種類	なし (空のディスク)	なし (空のディスク)
アカウントの種類	Standard HDD	Standard HDD
サイズ	20	20

• CLUSTERPRO の設定 (クラスタプロパティ)

設定項目	設定値	
	node-1	node-2
– クラスタ名	Cluster1	
– サーバ名	node-1	node-2
– タイムアウトタブ - ハートビートタイムアウト	210	

• CLUSTERPRO の設定 (フェイルオーバーグループ)

リソース名	設定項目	設定値
ミラーディスクリソース	リソース名	md
	詳細タブ - データパーティションのドライブ名	G:
	詳細タブ - クラスタパーティションのドライブ名	F:
Azure DNS リソース	リソース名	azuredns1
	レコードセット名	test-record1
	ゾーン名	cluster1.zone
	IP アドレス	(node-1 の場合)10.5.0.120 (node-2 の場合)10.5.0.121
	リソースグループ名	TestGroup1
	ユーザ URI	http://azure-test
	テナント ID	XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
	サービスプリンシパルのファイルパス	C:\Users\testlogin\ examplecert.pem
	Azure CLI ファイルパス	C:\Program Files (x86)\Microsoft SDKs\ Azure\CLI2\wbin\az.cmd

• CLUSTERPRO の設定 (監視リソース)

監視リソース名	設定項目	設定値
ミラーディスク監視リソース	監視リソース名	mdw1
Azure DNS 監視リソース	監視リソース名	azurednsw1
カスタム監視リソース	監視リソース名	genw1
	この製品で作成したスクリプト	オン
	監視タイプ	同期
	正常な戻り値	0
	回復動作	最終動作のみ実行
	回復対象	LocalServer
IP 監視リソース	監視リソース名	ipw1
	監視を行うサーバ	node-1

次のページに続く

表 4.3 – 前のページからの続き

監視リソース名	設定項目	設定値
	IP アドレス	10.5.0.121
	回復動作	最終動作のみ実行
	回復対象	LocalServer
IP 監視リソース	監視リソース名	ipw2
	監視を行うサーバ	node-2
	IP アドレス	10.5.0.120
	回復動作	最終動作のみ実行
	回復対象	LocalServer
マルチターゲット監視リソース	監視リソース名	mtw1
	監視リソース一覧	genw1 ipw1 ipw2
	回復動作	クラスタサービス停止と OS シャットダウン
	回復対象	LocalServer

4.2 Microsoft Azure の設定

Microsoft Azure ポータル (<https://portal.azure.com/>) にログインし、4.1. 構築例について を参考に以下の設定を行います。

1. リソースグループの作成

リソースを管理するリソースグループを作成します。

2. 仮想ネットワークの作成

仮想ネットワークを作成します。

3. 仮想マシンの作成

クラスタを構成する仮想マシンの数だけ作成します。

4. プライベート IP アドレスの設定

IP アドレスは初期設定では動的割り当てとなっているため、静的割り当てに変更します。

※ネットワークインターフェイスの IP 構成から割り当てを変更します。

※変更後は新しいプライベート IP アドレスを利用できるようにするために、仮想マシンが自動的に再起動されます。

5. DNS ゾーンの設定

DNS ゾーンを作成します。

4.3 インスタンスの設定

以下の手順で設定します。

OS の日本語化が必要な場合、以下を参照してください。

https://blogs.technet.microsoft.com/jpaztech/2017/12/21/japanese_langpack_etc/

1. ミラーディスクの準備

ミラーディスクリソース用のパーティションを設定します。

ミラーディスクリソース用のパーティションについては、『インストール&設定ガイド』 - 「システム構成を決定する」 - 「ハードウェア構成後の設定」 - 「2. ミラー用パーティションを設定する (ミラーディスク使用時は必須)」を参照してください。

2. OS 起動時間の調整、ネットワーク設定の確認、ファイアウォールの設定を確認、サーバの時刻を同期、パワーセービング機能をオフ

各手順は『インストール&設定ガイド』 - 「システム構成を決定する」 - 「ハードウェア構成後の設定」を参照してください。

3. Azure CLI のインストール

詳細な手順については、以下の Web サイトを参照してください。

Azure CLI のインストール:

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/cli/azure/install-azure-cli>

4. サービス プリンシパルの作成

Azure CLI を使用して、サービス プリンシパルを作成します。

Azure DNS リソースは Microsoft Azure にログインし、DNS ゾーンへの登録や監視を実行します。

Microsoft Azure へのログイン時、サービス プリンシパルによる Azure ログインを利用します。本書ではセキュリティ観点から証明書ベースの認証を記載しています。証明書には有効期限があることに注意してください。詳細は `az ad sp create-for-rbac` の `--years` オプションを参照してください。

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/cli/azure/ad/sp?view=azure-cli-latest#az-ad-sp-create-for-rbac>

サービス プリンシパルや詳細な手順については、以下の Web サイトを参照してください。

Azure CLI を使用してサインインする:

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/cli/azure/authenticate-azure-cli>

Azure CLI で Azure サービス プリンシパルを作成する:

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/cli/azure/create-an-azure-service-principal-azure-cli>

1. 組織のアカウントでログインします。

```
az login -u <アカウント名> -p <パスワード>
```

2. サービス プリンシパルを作成し、登録します。Cluster WebUI の Azure DNS リソース設定時に入力必要なため、表示される name および tenant はメモしてください。

以下の例では、C:\Users\testlogin\examplecert.pem にサービス プリンシパルが作成されます。

```
az ad sp create-for-rbac --create-cert --scope
{
  "appId": "xxxxxxxx-xxxx-xxxx-xxxx-xxxxxxxxxxxx",
  "displayName": "azure-test",
  "fileWithCertAndPrivateKey": "C:\Users\testlogin\examplecert.
pem",
  "name": "http://azure-test",
  "password": null,
  "tenant": "xxxxxxxx-xxxx-xxxx-xxxx-xxxxxxxxxxxx"
}
```

3. ログアウトします。

```
az logout --username <アカウント名>
```

4. 作成されたサービス プリンシパルを利用して、Microsoft Azure へログインできるか確認します。

```
az login --service-principal -u <上記の name の値> --tenant <上記の tenant の
値> -p <上記の fileWithCertAndPrivateKey の値>
```

サインインに成功すると、次の出力が表示されます。

```
[
  {
    "cloudName": "AzureCloud",
    "id": "xxxxxxxx-xxxx-xxxx-xxxx-xxxxxxxxxxxx",
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
"isDefault": true,
"name": "xxxxxxxxxx",
"state": "Enabled",
"tenantId": "xxxxxxxx-xxxx-xxxx-xxxx-xxxxxxxxxxxxxx",
"user": {
  "name": "http://azure-test",
  "type": "servicePrincipal"
}
}
```

5. ログアウトします。

```
az logout --username <上記の name の値>
```

作成されたサービス プリンシパルのロールを既定の Contributor(共同作成者) から別のロールに変更する場合、Actions プロパティとして以下のすべての操作へのアクセス権を持つロールを選択してください。この条件を満たさないロールに変更した場合、後程設定する Azure DNS 監視リソースによる監視がエラーにより失敗します。

Azure CLI 2.0 の場合

```
Microsoft.Network/dnsZones/A/write
Microsoft.Network/dnsZones/A/delete
Microsoft.Network/dnsZones/NS/read
```

5. CLUSTERPRO のインストール

インストール手順は『インストール&設定ガイド』を参照してください。

インストール完了後、OS の再起動を行ってください。

6. CLUSTERPRO のライセンスを登録

ライセンス登録手順は『インストール&設定ガイド』を参照してください。

4.4 CLUSTERPRO の設定

Cluster WebUI のセットアップ、および接続方法は『インストール&設定ガイド』-「クラスタ構成情報を作成する」を参照してください。

以下のリソース/監視リソースを追加する手順を記述します。

- ミラーディスクリソース
- Azure DNS リソース
- Azure DNS 監視リソース
- カスタム監視リソース (NP 解決用)
- IP 監視リソース (NP 解決用)
- マルチターゲット監視リソース (NP 解決用)

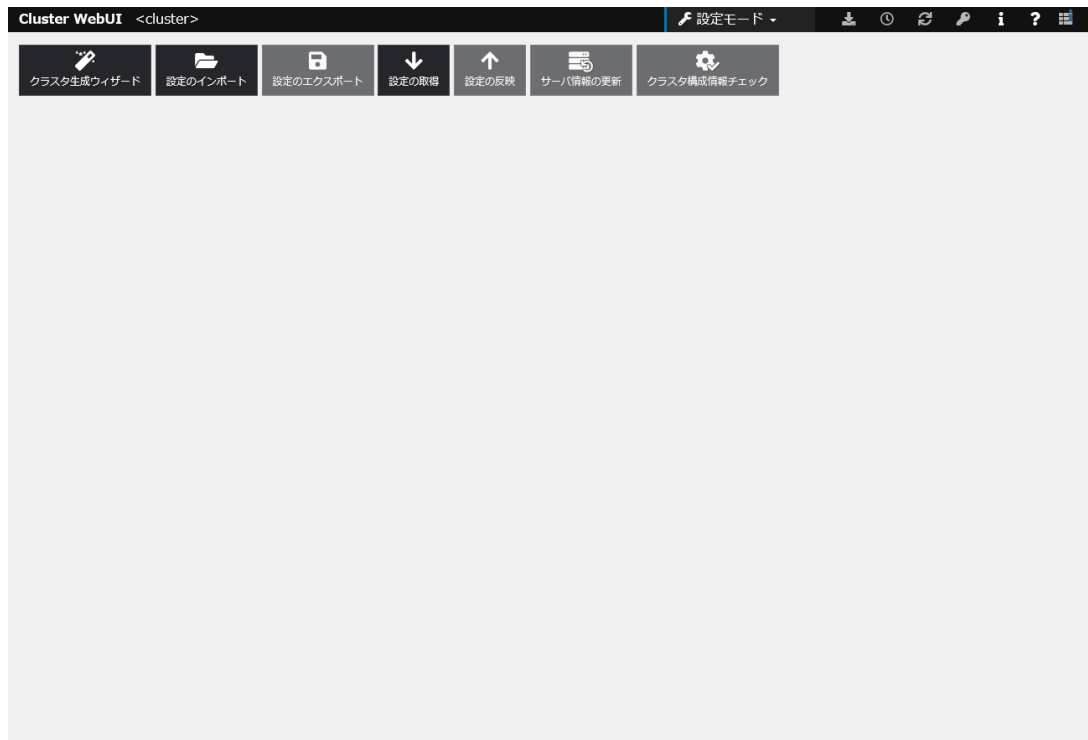
上記以外の設定は、『インストール&設定ガイド』、『リファレンスガイド』を参照してください。

1. クラスタの作成

最初に、クラスタ生成ウィザードを開始し、クラスタを構築します。

- クラスタの構築

1. Cluster WebUI にアクセスし、[クラスタ生成ウィザード] をクリックします。



2. [クラスタ生成ウィザード] 画面の [クラスタ] 画面が表示されます。

[クラスタ名] に任意のクラスタ名を入力します。

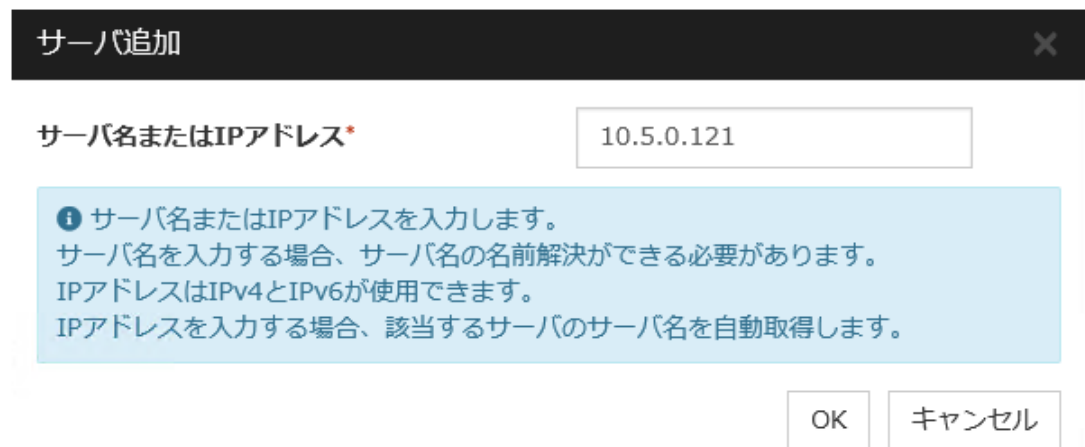
[言語] を適切に選択します。[次へ] をクリックします。



3. [基本設定] 画面が表示されます。

Cluster WebUI に接続したインスタンスがマスタサーバとして登録済みの状態で表示されます。

[追加] をクリックし、残りのインスタンスを追加します (インスタンスの Private IP アドレスを指定します)。[次へ] をクリックします。





4. [インタコネクト] 画面が表示されます。

インタコネクトのために使用する IP アドレス (各インスタンスの Private IP アドレス) を指定します。また、後で作成するミラーディスクリソースの通信経路として [MDC] に mdc1 を選択します。[次へ] をクリックします。



5. [NP 解決] 画面が表示されます。

ただし、NP 解決は本画面では設定せず、別途 IP 監視リソース、カスタム監視リソース、マルチターゲット監視リソースを追加することによって同等のことを実現します。NP 解決の設定は、後述の「3. 監視リソースの追加」で行います。

クラスタシステムにアクセスするクライアントの配置やオンプレミス環境との接続条件（専用線接続など）によって、NP 解決先や NP 解決の方法は、その都度検討する必要があります。推奨の NP 解決先や NP 解決の方法はありません。NP 解決にネットワークパーティション解決リソースを利用することも可能です。

[次へ] をクリックします。



2. グループリソースの追加

• グループの定義

フェイルオーバーグループを作成します。

1. [グループ一覧] 画面が表示されます。

[追加] をクリックします。



2. [グループの定義] 画面が表示されます。

[名前] にフェイルオーバーグループ名 (failover1) を設定します。[次へ] をクリックします。

グループの定義

failover X

基本設定 → 起動可能サーバ → グループ属性 → グループリソース

タイプ*

フェイルオーバー▼

サーバグループ設定を使用する

☐

名前*

failover1

コメント

① グループのタイプを選択します。
仮想マシンリソースを使用して仮想マシンをクラスタ化する場合、タイプは「仮想マシン」を選択します。それ以外の場合は「フェイルオーバー」を選択します。
サーバグループを使用する場合、「サーバグループ設定を使用する」チェックボックスをオンにします。

戻る

次へ▶

キャンセル

3. [起動可能サーバ] 画面が表示されます。
何も指定せず [次へ] をクリックします。
4. [グループ属性] 画面が表示されます。
何も指定せず [次へ] をクリックします。
5. [グループリソース一覧] 画面が表示されます。
以降の手順で、この画面でグループリソースを追加していきます。

グループの定義

failover X

基本設定 ✓ → 起動可能サーバ ✓ → グループ属性 ✓ → グループリソース

プロパティ

追加

削除

グループリソース一覧

名前

タイプ

リソースはありません

① 「追加」 ボタンを押して、リソースを追加します。
「プロパティ」 ボタンで選択したリソースのプロパティを設定します。

戻る

完了

キャンセル

- ミラーディスクリソース

ミラーディスクリソースを作成します。

詳細は『リファレンスガイド』 - 「ミラーディスクリソースを理解する」を参照してください。

1. [グループリソース一覧] で [追加] をクリックします。
2. [グループのリソース定義 | failover1] 画面が開きます。

[タイプ] ボックスでグループリソースのタイプ (ミラーディスクリソース) を選択し、[名前] ボックスにグループ名 (md) を入力します。[次へ] をクリックします。



3. [依存関係] 画面が表示されます。

何も指定せず [次へ] をクリックします。

4. [復旧動作] 画面が表示されます。[次へ] をクリックします。

5. [詳細] 画面が表示されます。

[起動可能サーバ] で [名前] 列中のサーバ名を選択し [追加] をクリックします。



6. [パーティションの選択] ダイアログボックスが表示されます。[接続] をクリックし、「6. 仮想マシンの設定」で作成したデータパーティションと、クラスタパーティションを選択し、[OK] をクリックし

ます。

パーティションの選択

情報取得

接続

データパーティション

ボリューム	ディスク番号	パーティション番号	サイズ	GUID
	0	1	500MB	
D:¥	1	1	10238MB	
F:¥	2	1	1024MB	
C:¥	0	2	129546MB	
G:¥	2	2	19453MB	

クラスタパーティション

ボリューム	ディスク番号	パーティション番号	サイズ	GUID
	0	1	500MB	
D:¥	1	1	10238MB	
F:¥	2	1	1024MB	
C:¥	0	2	129546MB	
G:¥	2	2	19453MB	

OK
キャンセル

7. node-1 について 5 と 6 を設定、次に node-2 について 5 と 6 を設定し、[完了] をクリックします。

グループのリソース定義 | failover1

md

[情報](#)
[依存関係](#)
[復旧動作](#)
[詳細](#)

ミラーディスク番号*

1

データパーティションのドライブ文字*

G:

クラスターパーティションのドライブ文字*

F:

クラスターパーティションのオフセットインデックス*

0

ミラーディスクコネク

選択

起動可能サーバ

名前	データパーティション	クラスターパーティション		名前
node-1			← 追加	
node-2			→ 削除	

編集

調整

戻る

完了

キャンセル

- Azure DNS リソース

Azure DNS に対してレコードを登録、解除する仕組みを提供します。

Azure DNS リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「Azure DNS リソースを理解する」を参照してください。

1. [グループリソース一覧] で [追加] をクリックします。
2. [グループのリソース定義 | failover1] 画面が開きます。[タイプ] ボックスでグループリソースのタイプ (Azure DNS リソース) を選択して、[名前] ボックスにグループ名 (azuredns1) を入力します。[次へ] をクリックします。

グループのリソース定義 | failover1 azuredns ✕

情報 → 依存関係 → 復旧動作 → 詳細

タイプ* Azure DNSリソース ▼

名前* azuredns1

コメント

ライセンス情報取得

ⓘ グループリソースの種類を選択して名前を入力してください。

戻る
次へ▶
キャンセル

3. [依存関係] 画面が表示されます。何も指定せず [次へ] をクリックします。
4. [復旧動作] 画面が表示されます。[次へ] をクリックします。
5. [レコードセット名]、[ゾーン名]、[IP アドレス]、[リソースグループ名]、[ユーザ URI]、[テナント ID]、[サービスプリンシパルのファイルパス]、[Azure CLI ファイルパス] に値を入力します。[IP アドレス] は各サーバの IP アドレスを使用する場合、各サーバのタブで IP アドレスを入力します。サーバ別の設定を行う場合は [共通] タブでは、任意のサーバの IP アドレスを記載し、他のサーバは個別設定を行うようにしてください。[ユーザ URI] には「9. サービス プリンシパルの作成」でメモした name を指定してください。[テナント ID] には「9. サービス プリンシパルの作成」でメモした tenant を指定してください。

グループのリソース定義 | failover1 azuredns ✕

情報 ✓ → 依存関係 ✓ → 復旧動作 ✓ → 詳細

共通 node-1 node-2

レコードセット名* test-record1

ゾーン名* cluster1.zone

IPアドレス* 10.5.0.120

TTL* 3600 秒

リソースグループ名* TestGroup1

アカウント

ユーザURI* http://azure-test

テナントID* xxxxxxxx-xxxx-xxxx-xxxx-xx

サービスプリンシパルのファイルパス* C:¥Users¥testlogin¥tmp_s7f

Azure CLI ファイルパス* C:¥Program Files (x86)¥Micr

非活性時にリソースレコードセットを削除する ☒

調整

戻る
完了
キャンセル

6. [完了] をクリックします。

3. 監視リソースの追加

- Azure DNS 監視リソース

Azure DNS に登録したレコードセットの確認および名前解決確認の監視機構を提供します。

Azure DNS 監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「Azure DNS 監視リソースを理解する」を参照してください。

Azure DNS リソースを 1 つ追加すると、Azure DNS 監視リソースが 1 つ自動的に作成されます。

- カスタム監視リソース

Microsoft Azure の Service Management API へ疎通可能かどうかを監視し、外部ネットワークとの通信の健全性を監視するためのスクリプトを設定します。

カスタム監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「カスタム監視リソースを理解する」を参照してください。

1. [モニタリソース一覧] で [追加] をクリックします。

2. [タイプ] ボックスでモニタリソースのタイプ (カスタム監視) を選択し、[名前] ボックスに監視リソース名 (genw1) を入力します。[次へ] をクリックします。

3. [監視 (共通)] 画面が表示されます。

[監視タイミング] を [常時] であることを確認し、[次へ] をクリックします。



モニタリソースの定義 genw ×

情報 ✓ → 監視(共通) → 監視(固有) → 回復動作

インターバル* 秒

タイムアウト* 秒

タイムアウト発生時にリトライしない ☐

タイムアウト発生時動作 回復動作を実行する ▼

リトライ回数* 回

監視開始待ち時間* 秒

監視タイミング

☒ 常時

☐ 活性時

対象リソース 参照

監視を行うサーバを選択する サーバ

監視処理時間メトリクスを送信する ☐

戻る 次へ キャンセル

4. [監視 (固有)] 画面が表示されます。

[この製品で作成したスクリプト] をチェックします。

作成するスクリプトのサンプルは以下のとおりです。

```
<CLUSTERPRO インストールパス>\bin\clpazure_port_checker -h management.core.  
windows.net -p 443  
EXIT %ERRORLEVEL%
```

[監視タイプ] を [同期] にチェックします。[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義 genw X

情報 ☒ → 監視(共通) ☒ → 監視(固有) ☒ → 回復動作

☐ ユーザアプリケーション
☒ この製品で作成したスクリプト

ファイル genw.bat 編集 表示 置換

監視タイプ ☒ 同期
☐ 非同期

正常な戻り値*

終了時アプリケーションを強制終了する ☐

クラスタ停止時に活性時監視の停止を待ち合わせる ☐

実行ユーザ

戻る 次へ キャンセル

5. [回復動作] 画面が表示されます。

[回復動作] に [最終動作のみ実行]、[回復対象] に [LocalServer]、[最終動作] に [何もしない] を設定します。

モニタリソースの定義

genw

情報

監視(共通)

監視(固有)

回復動作

回復動作

最終動作のみ実行

回復対象 *

LocalServer

参照

回復スクリプト実行回数

0

回

再活性前にスクリプトを実行する

☐

最大再活性回数

0

回

フェイルオーバー実行前にスクリプトを実行する

☐

フェイルオーバー実行前にマイグレーションを実行する

☐

フェイルオーバー先サーバ

☒ 安定動作サーバ

☐ 最高プライオリティサーバ

最大フェイルオーバー回数

0

回

最終動作前にスクリプトを実行する

☐

最終動作

何もしない

スクリプト設定

戻る

完了

キャンセル

6. [完了] をクリックして設定を終了します。

• IP 監視リソース

仮想マシンで構成されたクラスタ間の通信を監視し、内部ネットワークとの通信の健全性を監視する IP 監視リソースを作成します。

IP 監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「IP 監視リソースを理解する」を参照してください。

1. [モニタリソース一覧] で [追加] をクリックします。
2. [タイプ] ボックスでモニタリソースのタイプ (IP 監視) を選択し、[名前] ボックスに監視リソース名 (ipw1) を入力します。[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義 ipw ×

情報 → 監視(共通) → 監視(固有) → 回復動作

タイプ* IP監視 ▼

名前* ipw1

コメント

ライセンス情報取得

❗ モニタリソースの種類を選択して名前を入力してください。

◀ 戻る 次へ ▶ キャンセル

3. [監視 (共通)] 画面が表示されます。
[監視タイミグ] が [常時] であることを確認します。

モニタリソースの定義 ipw ×

情報 ✓ → 監視(共通) → 監視(固有) → 回復動作

インターバル* 60 秒

タイムアウト* 60 秒

タイムアウト発生時にリトライしない ☐

タイムアウト発生時動作 回復動作を実行する ▼

リトライ回数* 1 回

監視開始待ち時間* 0 秒

監視タイミグ

☒ 常時

☐ 活性時

対象リソース 参照

監視を行うサーバを選択する サーバ

監視処理時間メトリクスを送信する ☐

◀ 戻る 次へ ▶ キャンセル

[監視を行うサーバを選択する] で起動可能なサーバをひとつ選択し追加します。[OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。

異常検出サーバ

☐ 全てのサーバ
☒ 独自に設定する

起動可能なサーバ

名前
node-1

← 追加

→ 削除

利用可能なサーバ

名前
node-2

OK キャンセル 適用

4. [監視 (固有)] 画面が表示されます。

モニタリソースの定義 ipw ✕

情報 ✓ → 監視(共通) ✓ → **監視(固有)** → 回復動作

編集 追加 削除

IPアドレス一覧

IPアドレス

IPアドレスがありません

Pingタイムアウト* 5000 ミリ秒

◀ 戻る 次へ ▶ キャンセル

[IP アドレス一覧] で [追加] を選択し、3 で選択したサーバとは別のサーバの IP アドレスを設定します。
 [OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。

IPアドレスの入力

IPアドレス* 10.5.0.121

OK キャンセル

モニタリソースの定義 ipw ✕

情報 ✓ → 監視(共通) ✓ → **監視(固有)** → 回復動作

編集 追加 削除

IPアドレス一覧

IPアドレス

10.5.0.121

Pingタイムアウト* 5000 ミリ秒

◀ 戻る 次へ ▶ キャンセル

5. [回復動作] 画面が表示されます。

[回復動作] に [最終動作のみ実行]、[回復対象] に [LocalServer]、[最終動作] に [何もしない] を設定します。

6. [完了] をクリックして設定を終了します。

7. 次にもう一方のサーバでも、同様の監視リソースを作成します。[モニタリソース一覧] で [追加] をクリックします。

8. [タイプ] ボックスでモニタリソースのタイプ (IP 監視) を選択し、[名前] ボックスに監視リソース名 (ipw2) を入力します。[次へ] をクリックします。

9. [監視 (共通)] 画面が表示されます。

[監視タイミング] が [常時] であることを確認します。

[監視を行うサーバを選択する] で起動可能なサーバをひとつ選択し追加します。[OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。

10. [監視 (固有)] 画面が表示されます。

[IP アドレス一覧] で [追加] を選択し、9 で選択したサーバとは別のサーバの IP アドレスを設定しま

す。[OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。

11. [回復動作] 画面が表示されます。

[回復動作] に [最終動作のみ実行]、[回復対象] に [LocalServer]、[最終動作] に [何もしない] を設定します。

12. [完了] をクリックして設定を終了します。

- マルチターゲット監視リソース

Microsoft Azure の Service Management API への通信を監視するカスタム監視リソースと、仮想マシンで構成されたクラスタ間の IP 監視リソースの両方の状態を確認するマルチターゲット監視リソースを作成します。両方の監視リソースの状態が異常となった際に、NP 解決用の処理を記載したスクリプトを実行します。マルチターゲット監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「マルチターゲット監視リソースを理解する」を参照してください。

1. [モニタリソース一覧] で [追加] をクリックします。

2. [タイプ] ボックスでモニタリソースのタイプ (マルチターゲット監視) を選択し、[名前] ボックスに監視リソース名 (mtw1) を入力します。[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義

mtw ✕

情報 → 監視(共通) → 監視(固有) → 回復動作

タイプ*

マルチターゲット監視 ▼

名前*

mtw1

コメント

ライセンス情報取得

① モニタリソースの種類を選択して名前を入力してください。

戻る

次へ▶

キャンセル

3. [監視 (共通)] 画面が表示されます。

[監視タイミング] が [常時] であることを確認し、[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義

mtw ✕

情報 ✓ → 監視(共通) → 監視(固有) → 回復動作

インターバル*

60

秒

タイムアウト*

60

秒

タイムアウト発生時にリトライしない

☐

タイムアウト発生時動作

回復動作を実行する ▼

リトライ回数*

1

回

監視開始待ち時間*

0

秒

監視タイミング

☒ 常時

☐ 活性時

対象リソース

参照

監視を行うサーバを選択する

サーバ

監視処理時間メトリクスを送信する

☐

戻る

次へ▶

キャンセル

4. [監視 (固有)] 画面が表示されます。

利用可能なモニタリソース一覧から [追加] を選択し、Service Management API への疎通確認用カスタム監視リソース、両サーバに設定したそれぞれの IP 監視リソースの 3 つの監視リソースを追加します (genw1、ipw1、ipw2)。[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義

mtw

情報

監視(共通)

監視(固有)

回復動作

モニタリソース一覧

モニタリソース名	タイプ
genw1	genw
ipw1	ipw
ipw2	ipw

←

追加

→

削除

調整

利用可能なモニタリソース一覧

モニタリソース名	タイプ
userw	userw

戻る

次へ

キャンセル

5. [回復動作] 画面が表示されます。

[回復動作] に [最終動作のみ実行]、[回復対象] に [LocalServer]、[最終動作] に [クラスタサービス停止と OS シャットダウン] を設定します。

モニタリソースの定義

mtw

情報

監視(共通)

監視(固有)

回復動作

回復動作

最終動作のみ実行

回復対象

LocalServer

参照

回復スクリプト実行回数

0

回

再活性前にスクリプトを実行する

☐

最大再活性回数

0

回

フェイルオーバー実行前にスクリプトを実行する

☐

フェイルオーバー実行前にマイグレーションを実行する

☐

フェイルオーバー先サーバ

☒ 安定動作サーバ
☐ 最高プライオリティサーバ

最大フェイルオーバー回数

0

回

最終動作前にスクリプトを実行する

☐

最終動作

クラスタサービス停止とOSシャットダウン

スクリプト設定

戻る

完了

キャンセル

6. [完了] をクリックして設定を終了します。

4. クラスタプロパティの設定

クラスタプロパティの詳細は『リファレンスガイド』-「クラスタプロパティ」を参照してください。

- クラスタプロパティ

Microsoft Azure と CLUSTERPRO の連携用に、クラスタプロパティ内の設定を以下のように設定します。

1. Cluster WebUI から設定モードへ移動し、クラスタ名のプロパティアイコンをクリックします。

クラスタ名	cluster
コメント	
言語	日本語 ▼
OK キャンセル 適用	

2. [タイムアウト] タブを選択します。ハートビートの [タイムアウト] に以下の「A + B + C」の結果を設定します。

- A : NP 解決用のマルチターゲット監視リソースで監視している監視リソースの [インターバル] × ([リトライ回数] + 1)

※ 3 つある監視リソースのうち上記計算式の結果が大きい方を選択してください。

- B : マルチターゲット監視リソースの [インターバル] × ([リトライ回数] + 1)
- C : 30 秒 (マルチターゲット監視リソースでの異常検出前にハートビートがタイムアウトしないようにするための猶予時間。適宜変更可能)

注釈: ハートビートのタイムアウト値が、NP 解決用のモニタで異常を検出する時間より短い場合、NP 解決処理が動作する前にハートビートのタイムアウトを検出します。この場合、待機サーバでサービスが起動され、クラスタ内でサービスの二重起動が発生する可能性があります。

ネットワーク初期化完了待ち時間*	3	分
同期待ち時間*	5	分
ハートビート		
インターバル*	3	秒
タイムアウト*	270	秒
内部通信タイムアウト*	180	秒
既定値		
OK キャンセル 適用		

3. [OK] をクリックします。

5. 設定の反映とクラスタの起動

1. Cluster WebUI の設定モード から、[設定の反映] をクリックします。

[設定を反映しますか。] というポップアップメッセージが表示されますので、[OK] をクリックします。

アップロードに成功すると、[反映に成功しました。] のメッセージが表示されますので、[OK] をクリックします。

アップロードに失敗した場合は、表示されるメッセージに従って操作を行ってください。

2. Cluster WebUI の ツールバーのドロップダウンメニューで [操作モード] を選択して、操作モードに切り替えます。

3. Cluster WebUI の [ステータス] タブから [クラスタ開始] をクリックし、確認画面で [開始] をクリックします。

詳細は『インストール&設定ガイド』-「クラスタを生成するには」を参照してください。

4.5 動作確認

構築した環境が正常に動作するかを、監視異常を発生させフェイルオーバーグループがフェイルオーバーすることにより確認します。

既にクラスタが正常に起動している状態からの確認手順は以下のとおりです。

1. フェイルオーバーグループ (failover1) が、現用系ノードの node-1 で起動します。Cluster WebUI [ステータス] タブにおいて failover1 が node-1 で [起動済] になっていることを確認します。
2. Microsoft Azure ポータルにログインし、DNS ゾーンより cluster1.zone を選択後、[概要] を選択します。画面右上に表示されている DNS サーバー (画面例では、ネームサーバー 1、ネームサーバー 2、ネームサーバー 3、ネームサーバー 4) を確認します。
3. 上記で確認した DNS サーバーに対し、nslookup コマンドで該当レコードセットが存在することを確認します。

```
nslookup test-record1.cluster1.zone <上記で確認した DNS サーバー>
```

4. Microsoft Azure ポータルにおいて、DNS ゾーンから A レコードを手動で削除します。これにより、azuredns1 は監視異常を検出します。DNS ゾーンより cluster1.zone を選択し、[概要] を選択します。
5. 削除するレコードを選択し、[削除] を選択します。削除確認にて [はい] を選択します。
6. azuredns1 の [インターバル] 後にフェイルオーバーグループ (failover1) が異常になり、ノード node-2 へフェイルオーバーします。Cluster WebUI [ステータス] タブにおいて failover1 が node-2 で [起動済] になっていることを確認します。
7. 上記で確認した DNS サーバーに対し、nslookup コマンドで該当レコードセットが存在することを確認します。

```
nslookup test-record1.cluster1.zone <上記で確認した DNS サーバー>
```

以上で、DNS サーバーから A レコードを削除した場合におけるフェイルオーバーの動作確認は完了です。

その他の障害発生時の動作確認については適宜実施してください。

第 5 章

構築手順 (パブリックロードバランサーを使用した HA クラスタの場合)

5.1 構築例について

本書では、Microsoft Azure において、CLUSTERPRO を使用した 2 ノードでの片方向スタンバイクラスタの構築手順を紹介します。本手順は、node-1 を現用系サーバとしたミラーディスク型の構成を対象としています。

以下の表は既定値が存在しないパラメータ、および既定値から変更したパラメータについて記載しています。

- Microsoft Azure の設定 (node-1、node-2 で共通の設定)

設定項目	設定値
リソース グループの設定	
– 名前	TestGroup1
– リージョン	(アジア太平洋) 東日本
仮想ネットワークの設定	
– 名前	Vnet1
– アドレス空間	10.5.0.0/24

次のページに続く

表 5.1 – 前のページからの続き

設定項目	設定値
– サブネット名	Vnet1-1
– サブネットアドレス範囲	10.5.0.0/24
– リソース グループ名	TestGroup1
– 場所	(アジア太平洋) 東日本
ロードバランサーの設定	
– 名前	TestLoadBalancer
– 種類	パブリック
– パブリック IP アドレス名	TestLoadBalancerPublicIP
– パブリック IP アドレス - 割り当て	静的
– リソース グループ	TestGroup1
– 地域	(アジア太平洋) 東日本
– バックエンドプール - 名前	TestBackendPool
– 関連付け先	可用性セット

次のページに続く

表 5.1 – 前のページからの続き

設定項目	設定値
– ターゲット仮想マシン	node-1 node-2
– ネットワーク IP 構成	10.5.0.120 10.5.0.121
– 正常性プローブ - 名前	TestHealthProbe
– 正常性プローブ - ポート	26001
– 負荷分散規則 - 名前	TestLoadBalancingRule
– 負荷分散規則 - ポート	80(業務を提供しているポート番号)
– 負荷分散規則 - バックエンドポート	8080(業務を提供しているポート番号)
受信セキュリティ規則の設定	
– 名前	TestHTTP
– プロトコル	TCP
– 宛先ポート範囲	8080(業務を提供しているポート番号)

- Microsoft Azure の設定 (node-1、node-2 でそれぞれ設定)

設定項目	設定値	
	node-1	node-2
仮想マシンの設定		
ディスクの種類	Standard HDD	Standard HDD
ユーザー名	testlogin	testlogin
パスワード	PassWord_123	PassWord_123
リソース グループ名	TestGroup1	TestGroup1
地域	(アジア太平洋) 東日本	(アジア太平洋) 東日本
ネットワーク セキュリティ グループの設定		
名前	node-1-nsg	node-2-nsg
可用性セットの設定		
名前	AvailabilitySet-1	AvailabilitySet-1
更新ドメイン	5	5
障害ドメイン	2	2
診断ストレージアカウントの設定		
名前	自動生成	自動生成
パフォーマンス	Standard	Standard
レプリケーション	ローカル冗長ストレージ (LRS)	ローカル冗長ストレージ (LRS)
IP 構成の設定		
IP アドレス	10.5.0.120	10.5.0.121
ディスクの設定		
名前	node-1_DataDisk_0	node-2_DataDisk_0
ソースの種類	なし (空のディスク)	なし (空のディスク)
アカウントの種類	Standard HDD	Standard HDD
サイズ	20	20

- CLUSTERPRO の設定 (クラスタプロパティ)

設定項目	設定値	
	node-1	node-2
- クラスター名	Cluster1	
- サーバ名	node-1	node-2
- タイムアウトタブ - ハート ビートタイムアウト	210	

• CLUSTERPRO の設定 (フェイルオーバーグループ)

リソース名	設定項目	設定値
ミラーディスクリソース	リソース名	md
	詳細タブ - データパーティションのドライブ文字	G:
	詳細タブ - クラスターパーティションのドライブ文字	F:
Azure プロープポートリソース	リソース名	azurepp1
	プロープポート	26001(正常性プロープ - ポートで指定した値)

• CLUSTERPRO の設定 (監視リソース)

監視リソース名	設定項目	設定値
ミラーディスク監視リソース	監視リソース名	mdw1
Azure プロープポート監視リソース	監視リソース名	azureppw1
	回復対象	azurepp1
Azure ロードバランス監視リソース	監視リソース名	aurelbw1
	回復対象	azurepp1
カスタム監視リソース	監視リソース名	genw1
	この製品で作成したスクリプト	オン
	監視タイプ	同期
	正常な戻り値	0

次のページに続く

表 5.4 – 前のページからの続き

監視リソース名	設定項目	設定値
	回復動作	最終動作のみ実行
	回復対象	LocalServer
IP 監視リソース	監視リソース名	ipw1
	監視を行うサーバ	node-1
	IP アドレス	10.5.0.121
	回復動作	最終動作のみ実行
	回復対象	LocalServer
IP 監視リソース	監視リソース名	ipw2
	監視を行うサーバ	node-2
	IP アドレス	10.5.0.120
	回復動作	最終動作のみ実行
	回復対象	LocalServer
マルチターゲット監視リソース	監視リソース名	mtw1
	監視リソース一覧	genw1 ipw1 ipw2
	回復動作	最終動作のみ実行
	回復対象	LocalServer
	最終動作前にスクリプトを実行する	オン
	タイムアウト	30

5.2 Microsoft Azure の設定

Microsoft Azure ポータル (<https://portal.azure.com/>) にログインし、5.1. 構築例について を参考に以下の設定を行います。

1. リソースグループの作成

リソースを管理するリソースグループを作成します。

2. 仮想ネットワークの作成

仮想ネットワークを作成します。

3. 仮想マシンの作成

クラスタを構成する仮想マシンの数だけ作成します。

4. プライベート IP アドレスの設定

IP アドレスは初期設定では動的割り当てとなっているため、静的割り当てに変更します。

※ネットワークインターフェイスの IP 構成から割り当てを変更します。

※変更後は新しいプライベート IP アドレスを利用できるようにするために、仮想マシンが自動的に再起動されます。

5. ロードバランサーの作成

1. ロードバランサーを作成します。詳細は以下の Web サイトを参照してください。

- Load Balancer のドキュメント:

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/azure/load-balancer/>

※ ロードバランサーの種類は [パブリック] を選択し作成します。

※ デプロイには数分掛かります。

2. 仮想マシンをバックエンドプールに紐付けます。
3. 正常性プローブを設定します。
4. 負荷分散規則を設定します。
5. 受信セキュリティ規則を設定します。

ネットワーク セキュリティ グループの受信セキュリティ規則に負荷分散規則で設定したバックエンドポートを追加します。

5.3 インスタンスの設定

以下の手順で設定します。

OS の日本語化が必要な場合、以下を参照してください。

https://blogs.technet.microsoft.com/jpaztech/2017/12/21/japanese_langpack_etc/

1. ミラーディスクの準備

ミラーディスクリソース用のパーティションを設定します。

ミラーディスクリソース用のパーティションについては、『インストール&設定ガイド』 - 「システム構成を決定する」 - 「ハードウェア構成後の設定」 - 「2. ミラー用パーティションを設定する (ミラーディスク使用時は必須)」を参照してください。

2. OS 起動時間の調整、ネットワーク設定の確認、ファイアウォールの設定を確認、サーバの時刻を同期、パワーセービング機能をオフ

各手順は『インストール&設定ガイド』 - 「システム構成を決定する」 - 「ハードウェア構成後の設定」を参照してください。

3. CLUSTERPRO のインストール

インストール手順は『インストール&設定ガイド』を参照してください。

インストール完了後、OS の再起動を行ってください。

4. CLUSTERPRO のライセンスを登録

ライセンス登録手順は『インストール&設定ガイド』を参照してください。

5.4 CLUSTERPRO の設定

Cluster WebUI のセットアップ、および接続方法は『インストール&設定ガイド』-「クラスタ構成情報を作成する」を参照してください。

以下のリソース/監視リソースを追加する手順を記述します。

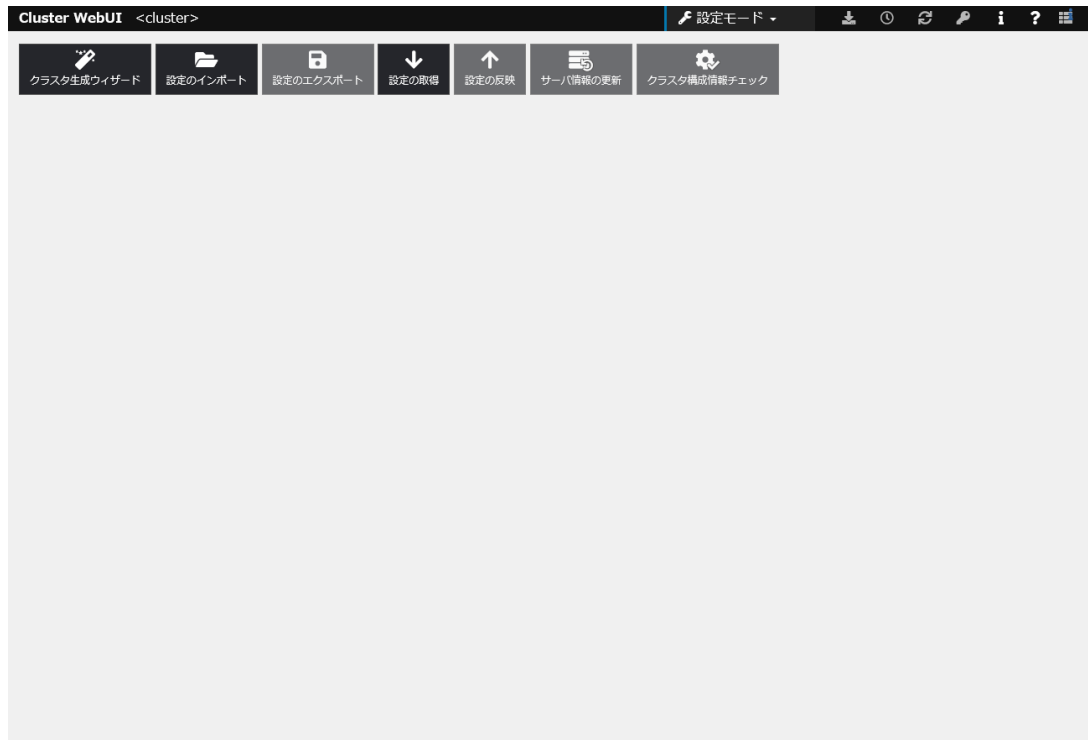
- ミラーディスクリソース
- Azure プロブポートリソース
- Azure プロブポート監視リソース
- Azure ロードバランス監視リソース
- カスタム監視リソース (NP 解決用)
- IP 監視リソース (NP 解決用)
- マルチターゲット監視リソース (NP 解決用)

上記以外の設定は、『インストール&設定ガイド』、『リファレンスガイド』を参照してください。

1. クラスタの作成

最初に、クラスタ生成ウィザードを開始し、クラスタを構築します。

- クラスタの構築
 1. Cluster WebUI にアクセスし、[クラスタ生成ウィザード] をクリックします。



2. [クラスタ生成ウィザード] 画面の [クラスタ] 画面が表示されます。

[クラスタ名] に任意のクラスタ名を入力します。

[言語] を適切に選択します。[次へ] をクリックします。

3. [基本設定] 画面が表示されます。

Cluster WebUI に接続したインスタンスがマスタサーバとして登録済みの状態で表示されます。

[追加] をクリックし、残りのインスタンスを追加します (インスタンスの Private IP アドレスを指定します)。[次へ] をクリックします。

サーバ追加

サーバ名またはIPアドレス*

10.5.0.121

サーバ名またはIPアドレスを入力します。

サーバ名を入力する場合、サーバ名の名前解決ができる必要があります。

IPアドレスはIPv4とIPv6が使用できます。

IPアドレスを入力する場合、該当するサーバのサーバ名を自動取得します。

OK

キャンセル

クラスタ生成ウィザード

クラスタ

サーバ

サーバ

サーバ

→

基本設定

→

インタコネクト

→

NP解決

→

グループ

→

モニタ

追加

削除

サーバの定義一覧

順位	名前
マスタサーバ	node-1
1	node-2

↑

↓

サーバグループの設定

設定

「追加」ボタンを押して、クラスタを構成するサーバを追加します。

サーバの優先順位は「↑」、「↓」ボタンで変更します。

サーバグループを使用する場合は「設定」ボタンでサーバグループを設定します。

戻る

次へ

キャンセル

4. [インタコネクト] 画面が表示されます。

インタコネクトのために使用する IP アドレス (各インスタンスの Private IP アドレス) を指定します。また、後で作成するミラーディスクリソースの通信経路として [MDC] に mdc1 を選択します。[次へ] をクリックします。

クラスタ生成ウィザード

クラスタ

サーバ

サーバ

サーバ

→

基本設定

→

インタコネクト

→

NP解決

→

グループ

→

モニタ

プロパティ

追加

削除

インタコネクト一覧

優先度	種別	MDC	node-1	node-2
1	カーネルモード	mdc1	10.5.0.120	10.5.0.121

↑

↓

クラスタを構成するサーバ間のインタコネクトを設定します。

「追加」ボタンでインタコネクトを追加し、種別を選択します。

「カーネルモード」、「Witness」はハートビートに使用する経路を設定します。「ミラー通信専用」はデータミラーリング通信専用使用する経路を設定します。

「カーネルモード」は一つ以上設定する必要があります。二つ以上設定することを推奨します。

「カーネルモード」の場合は各サーバ列のセルをクリックしてIPアドレスを設定します。

「Witness」の場合は各サーバ列のセルをクリックして「使用する」、「使用しない」を設定し、「プロパティ」ボタンで詳細を設定します。

クラスタサーバ間専用通信のLANを優先的に使用するよう、「↑」、「↓」ボタンで優先度を設定します。

「ミラー通信専用」の場合は各サーバ列のセルをクリックしてIPアドレスを設定します。

データミラーリング通信に使用する通信経路は「MDC」列で通信経路に割り当てるミラーディスクコネクト名を選択します。

戻る

次へ

キャンセル

74

第 5 章 構築手順 (パブリックロードバランサーを使用した HA クラスタの場合)

5. [NP 解決] 画面が表示されます。

ただし、NP 解決は本画面では設定せず、別途 IP 監視リソース、カスタム監視リソース、マルチターゲット監視リソースを追加することによって同等のことを実現します。NP 解決の設定は、後述の「3. 監視リソースの追加」で行います。

クラスタシステムにアクセスするクライアントの配置やオンプレミス環境との接続条件（専用線接続など）によって、NP 解決先や NP 解決の方法は、その都度検討する必要があります。推奨の NP 解決先や NP 解決の方法はありません。NP 解決にネットワークパーティション解決リソースを利用することも可能です。

[次へ] をクリックします。



2. グループリソースの追加

• グループの定義

フェイルオーバーグループを作成します。

1. [グループ一覧] 画面が表示されます。

[追加] をクリックします。



2. [グループの定義] 画面が表示されます。

[名前] にフェイルオーバーグループ名 (failover1) を設定します。[次へ] をクリックします。

グループの定義

failover ✕

基本設定 → 起動可能サーバ → グループ属性 → グループリソース

タイプ*

フェイルオーバー▼

サーバグループ設定を使用する

☐

名前*

failover1

コメント

① グループのタイプを選択します。
仮想マシンリソースを使用して仮想マシンをクラスタ化する場合、タイプは「仮想マシン」を選択します。それ以外の場合は「フェイルオーバー」を選択します。
サーバグループを使用する場合、「サーバグループ設定を使用する」チェックボックスをオンにします。

戻る

次へ▶

キャンセル

3. [起動可能サーバ] 画面が表示されます。

何も指定せず [次へ] をクリックします。

4. [グループ属性] 画面が表示されます。

何も指定せず [次へ] をクリックします。

5. [グループリソース一覧] 画面が表示されます。

以降の手順で、この画面でグループリソースを追加していきます。

グループの定義

failover ✕

基本設定 ✓ → 起動可能サーバ ✓ → グループ属性 ✓ → グループリソース

プロパティ

追加

削除

グループリソース一覧

名前	タイプ
リソースはありません	

① 「追加」 ボタンを押して、リソースを追加します。
「プロパティ」 ボタンで選択したリソースのプロパティを設定します。

戻る

完了

キャンセル

- ミラーディスクリソース

ミラーディスクリソースを作成します。

詳細は『リファレンスガイド』-「ミラーディスクリソースを理解する」を参照してください。

1. [グループリソース一覧] で [追加] をクリックします。

2. [グループのリソース定義 | failover1] 画面が開きます。

[タイプ] ボックスでグループリソースのタイプ (ミラーディスクリソース) を選択し、[名前] ボックスにグループ名 (md) を入力します。[次へ] をクリックします。

3. [依存関係] 画面が表示されます。

何も指定せず [次へ] をクリックします。

4. [復旧動作] 画面が表示されます。[次へ] をクリックします。

5. [詳細] 画面が表示されます。

[起動可能サーバ] で [名前] 列中のサーバ名を選択し [追加] をクリックします。

6. [パーティションの選択] ダイアログボックスが表示されます。[接続] をクリックし、「5. 仮想マシンの設定」で作成したデータパーティションと、クラスタパーティションを選択し、[OK] をクリックし

ます。

パーティションの選択

情報取得

接続

データパーティション

ボリューム	ディスク番号	パーティション番号	サイズ	GUID
	0	1	500MB	
D:¥	1	1	10238MB	
F:¥	2	1	1024MB	
C:¥	0	2	129546MB	
G:¥	2	2	19453MB	

クラスタパーティション

ボリューム	ディスク番号	パーティション番号	サイズ	GUID
	0	1	500MB	
D:¥	1	1	10238MB	
F:¥	2	1	1024MB	
C:¥	0	2	129546MB	
G:¥	2	2	19453MB	

OK
キャンセル

7. node-1 について 5 と 6 を設定、次に node-2 について 5 と 6 を設定し、[完了] をクリックします。

グループのリソース定義 | failover1
md

情報 ✔ → 依存関係 ✔ → 復旧動作 ✔ → 詳細

ミラーディスク番号*

1 ▼

データパーティションのドライブ文字*

G:

クラスタパーティションのドライブ文字*

F:

クラスタパーティションのオフセットインデックス*

0 ▼

ミラーディスクコネク

選択

起動可能サーバ

名前	データパーティション	クラスタパーティション		名前
node-1			← 追加 → 削除	
node-2				

編集

調整

戻る

完了

キャンセル

- Azure プローブポートリソース

Microsoft Azure 上で CLUSTERPRO を利用する場合、業務が稼働するノードの特定のポートでロードバランサーからの死活監視を待ち受ける仕組みを提供します。

Azure プローブポートリソースの詳細は『リファレンスガイド』-「Azure プローブポートリソースを理解する」を参照してください。

1. [グループリソース一覧] で [追加] をクリックします。
2. [グループのリソース定義 | failover1] 画面が開きます。[タイプ] ボックスでグループリソースのタイプ (Azure プローブポートリソース) を選択して、[名前] ボックスにグループ名 (azurepp1) を入力します。[次へ] をクリックします。

グループのリソース定義 | failover1 azurepp ✕

情報 → 依存関係 → 復旧動作 → 詳細

タイプ* Azureプローブポートリソース ▼

名前* azurepp1

コメント

ライセンス情報取得

① グループリソースの種類を選択して名前を入力してください。

戻る 次へ キャンセル

3. [依存関係] 画面が表示されます。何も指定せず [次へ] をクリックします。

4. [復旧動作] 画面が表示されます。[次へ] をクリックします。

5. [プローブポート] にロードバランサーの設定 (正常性プローブの設定) 時に [ポート] として指定した値を入力します。

グループのリソース定義 | failover1 azurepp ✕

情報 ✓ → 依存関係 ✓ → 復旧動作 ✓ → 詳細

プローブポート* 26001

調整

戻る 完了 キャンセル

6. [完了] をクリックします。

3. 監視リソースの追加

- Azure プローブポート監視リソース

Microsoft Azure プローブポートリソースが起動しているノードに対して、死活監視のためのポートの監視機構を提供します。

Azure プローブポート監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「Azure プローブポート監視リソースを理解する」を参照してください。

Azure プローブポートリソースを 1 つ追加すると、Azure プローブポート監視リソースが 1 つ自動的に作成されます。

- Azure ロードバランス監視リソース

Microsoft Azure プローブポートリソースが起動していないノードに対して、プローブポートと同じポート番号が開放されていないかの監視機構を提供します。

Azure ロードバランス監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「Azure ロードバランス監視リソースを理解する」を参照してください。

Azure プローブポートリソースを 1 つ追加すると、Azure ロードバランス監視リソースが 1 つ自動的に作成されます。

- カスタム監視リソース

Microsoft Azure の Service Management API へ疎通可能かどうかを監視し、外部ネットワークとの通信の健全性を監視するためのスクリプトを設定します。

カスタム監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「カスタム監視リソースを理解する」を参照してください。

1. [モニタリソース一覧] で [追加] をクリックします。
2. [タイプ] ボックスでモニタリソースのタイプ (カスタム監視) を選択し、[名前] ボックスに監視リソース名 (genw1) を入力します。[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義 genw ✕

情報 → 監視(共通) → 監視(固有) → 回復動作

タイプ* カスタム監視 ▼

名前* genw1

コメント

ライセンス情報取得

❗ モニタリソースの種類を選択して名前を入力してください。

戻る 次へ キャンセル

3. [監視 (共通)] 画面が表示されます。
- [監視タイミング] を [常時] であることを確認し、[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義 genw X

情報 ☒ → 監視(共通) ☒ → 監視(固有) ☒ → 回復動作

インターバル* 秒

タイムアウト* 秒

タイムアウト発生時にリトライしない ☐

タイムアウト発生時動作 ▼

リトライ回数* 回

監視開始待ち時間* 秒

監視タイミング

☒ 常時

☐ 活性時

対象リソース 参照

監視を行うサーバを選択する

監視処理時間メトリクスを送信する ☐

◀ 戻る 次へ ▶ キャンセル

4. [監視 (固有)] 画面が表示されます。

[この製品で作成したスクリプト] をチェックします。

作成するスクリプトのサンプルは以下のとおりです。

```
<CLUSTERPRO インストールパス>\bin\clpazure_port_checker -h management.core.  
windows.net -p 443  
EXIT %ERRORLEVEL%
```

[監視タイプ] を [同期] にチェックします。[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義 genw X

情報 ☒ → 監視(共通) ☒ → 監視(固有) ☒ → 回復動作

☐ ユーザアプリケーション

☒ この製品で作成したスクリプト

ファイル 編集 表示 置換

監視タイプ ☒ 同期 ☐ 非同期

正常な戻り値*

終了時アプリケーションを強制終了する ☐

クラスタ停止時に活性時監視の停止を待ち合わせる ☐

実行ユーザ

◀ 戻る 次へ ▶ キャンセル

5. [回復動作] 画面が表示されます。

[回復動作] に [最終動作のみ実行]、[回復対象] に [LocalServer]、[最終動作] に [何もしない] を設定します。

6. [完了] をクリックして設定を終了します。

• IP 監視リソース

仮想マシンで構成されたクラスタ間の通信を監視し、内部ネットワークとの通信の健全性を監視する IP 監視リソースを作成します。

IP 監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「IP 監視リソースを理解する」を参照してください。

1. [モニタリソース一覧] で [追加] をクリックします。
2. [タイプ] ボックスでモニタリソースのタイプ (IP 監視) を選択し、[名前] ボックスに監視リソース名 (ipw1) を入力します。[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義 ipw ×

情報 → 監視(共通) → 監視(固有) → 回復動作

タイプ* IP監視 ▼

名前* ipw1

コメント

ライセンス情報取得

❗ モニタリソースの種類を選択して名前を入力してください。

◀ 戻る 次へ ▶ キャンセル

3. [監視 (共通)] 画面が表示されます。
[監視タイミング] が [常時] であることを確認します。

モニタリソースの定義 ipw ×

情報 ✓ → 監視(共通) → 監視(固有) → 回復動作

インターバル* 60 秒

タイムアウト* 60 秒

タイムアウト発生時にリトライしない ☐

タイムアウト発生時動作 回復動作を実行する ▼

リトライ回数* 1 回

監視開始待ち時間* 0 秒

監視タイミング

☒ 常時

☐ 活性時

対象リソース 参照

監視を行うサーバを選択する サーバ

監視処理時間メトリクスを送信する ☐

◀ 戻る 次へ ▶ キャンセル

[監視を行うサーバを選択する] で起動可能なサーバをひとつ選択し追加します。[OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。

異常検出サーバ

☐ 全てのサーバ
☒ 独自に設定する

起動可能なサーバ

名前
node-1

← 追加

→ 削除

利用可能なサーバ

名前
node-2

OK キャンセル 適用

4. [監視 (固有)] 画面が表示されます。

モニタリソースの定義 ipw ✕

情報 ✓ → 監視(共通) ✓ → 監視(固有) → 回復動作

編集 追加 削除

IPアドレス一覧

IPアドレス

IPアドレスがありません

Pingタイムアウト* 5000 ミリ秒

◀ 戻る 次へ ▶ キャンセル

[IP アドレス一覧] で [追加] を選択し、3 で選択したサーバとは別のサーバの IP アドレスを設定します。[OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。

IPアドレスの入力

IPアドレス* 10.5.0.121

OK キャンセル

モニタリソースの定義 ipw ×

情報 ✓ → 監視(共通) ✓ → 監視(固有) ✓ → 回復動作

編集 追加 削除

IPアドレス一覧

IPアドレス
10.5.0.121

Pingタイムアウト* ミリ秒

戻る 次へ キャンセル

5. [回復動作] 画面が表示されます。

[回復動作] に [最終動作のみ実行]、[回復対象] に [LocalServer]、[最終動作] に [何もしない] を設定します。

モニタリソースの定義 ipw ×

情報 ✓ → 監視(共通) ✓ → 監視(固有) ✓ → 回復動作

回復動作

回復対象* 参照

回復スクリプト実行回数 回

再活性前にスクリプトを実行する ☐

最大再活性回数 回

フェイルオーバー実行前にスクリプトを実行する ☐

フェイルオーバー実行前にマイグレーションを実行する ☐

フェイルオーバー先サーバ ☒ 安定動作サーバ ☐ 最高プライオリティサーバ

最大フェイルオーバー回数 回

最終動作前にスクリプトを実行する ☐

最終動作

スクリプト設定

戻る 完了 キャンセル

6. [完了] をクリックして設定を終了します。

7. 次にもう一方のサーバでも、同様の監視リソースを作成します。[モニタリソース一覧] で [追加] をクリックします。

8. [タイプ] ボックスでモニタリソースのタイプ (IP 監視) を選択し、[名前] ボックスに監視リソース名 (ipw2) を入力します。[次へ] をクリックします。
9. [監視 (共通)] 画面が表示されます。
 [監視タイミング] が [常時] であることを確認します。
 [監視を行うサーバを選択する] で起動可能なサーバをひとつ選択し追加します。
 [OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。
10. [監視 (固有)] 画面が表示されます。
 [共通] タブの [IP アドレス一覧] で [追加] を選択し、9 で選択したサーバとは別のサーバの IP アドレスを設定します。[OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。
11. [回復動作] 画面が表示されます。
 [回復動作] に [最終動作のみ実行]、[回復対象] に [LocalServer]、[最終動作] に [何もしない] を設定します。

モニタリソースの定義 ipw X

情報 ✓ → 監視(共通) ✓ → 監視(固有) ✓ → 回復動作

回復動作 最終動作のみ実行 ▼

回復対象 * LocalServer 参照

回復スクリプト実行回数 0 回

再活性前にスクリプトを実行する ☐

最大再活性回数 0 回

フェイルオーバー実行前にスクリプトを実行する ☐

フェイルオーバー実行前にマイグレーションを実行する ☐

フェイルオーバー先サーバ ☒ 安定動作サーバ ☐ 最高プライオリティサーバ

最大フェイルオーバー回数 0 回

最終動作前にスクリプトを実行する ☐

最終動作 何もしない ▼

スクリプト設定

戻る 完了 キャンセル

12. [完了] をクリックして設定を終了します。

- マルチターゲット監視リソース

Microsoft Azure の Service Management API への通信を監視するカスタム監視リソースと、仮想マシンで構成されたクラスタ間の IP 監視リソースの両方の状態を確認するマルチターゲット監視リソースを作成します。両方の監視リソースの状態が異常となった際に、NP 解決用の処理を記載したスクリプトを実行します。マルチターゲット監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「マルチターゲット監視リソースを理解する」を参照してください。

1. [モニタリソース一覧] で [追加] をクリックします。
2. [タイプ] ボックスでモニタリソースのタイプ (マルチターゲット監視) を選択し、[名前] ボックスに監視リソース名 (mtw1) を入力します。[次へ] をクリックします。

3. [監視 (共通)] 画面が表示されます。
[監視タイミング] が [常時] であることを確認し、[次へ] をクリックします。

4. [監視 (固有)] 画面が表示されます。

利用可能なモニタリソース一覧から [追加] を選択し、Service Management API への疎通確認用カスタム監視リソース、両サーバに設定したそれぞれの IP 監視リソースの 3 つの監視リソースを追加します (genw1、ipw1、ipw2)。[次へ] をクリックします。

モニタリソースの定義

mtw X

情報

監視(共通)

監視(固有)

回復動作

モニタリソース一覧

モニタリソース名	タイプ
genw1	genw
ipw1	ipw
ipw2	ipw

← 追加

→ 削除

調整

利用可能なモニタリソース一覧

モニタリソース名	タイプ
userw	userw

戻る

次へ

キャンセル

5. [回復動作] 画面が表示されます。

[回復動作] に [最終動作のみ実行]、[最終動作前にスクリプトを実行する] をチェック、[回復対象] に [LocalServer]、[最終動作] に [何もしない] を設定します。

[スクリプト設定] をクリックし、マルチターゲット監視リソースが異常検出時に実行するスクリプトを作成します。

モニタリソースの定義

mtw

情報

監視(共通)

監視(固有)

回復動作

回復動作

最終動作のみ実行

回復対象

LocalServer

参照

回復スクリプト実行回数

0

回

再活性前にスクリプトを実行する

☐

最大再活性回数

0

回

フェイルオーバー実行前にスクリプトを実行する

☐

フェイルオーバー実行前にマイグレーションを実行する

☐

フェイルオーバー先サーバ

安定動作サーバ

最高プライオリティサーバ

最大フェイルオーバー回数

0

回

最終動作前にスクリプトを実行する

☒

最終動作

何もしない

スクリプト設定

戻る

完了

キャンセル

6. スクリプトの編集ダイアログが表示されます。

[この製品で作成したスクリプト] をチェックし、スクリプトを [編集] します。作成するスクリプトのサンプルは以下のとおりです。

以下は「4.1. 構築例について」を参照して設定してください。ポートは業務により異なります。

- ロードバランサーの負荷分散規則 - バックエンドポート
- ロードバランサーの負荷分散規則 - ポート
- ロードバランサーのフロントエンド IP(パブリック IP アドレス)

```

rem *****
rem Check Active Node
rem *****
<CLUSTERPRO インストールパス>\bin\clpazure_port_checker -h 127.0.0.1 -p <ロードバランサーの負荷分散規則 - バックエンドポート>
IF NOT "%ERRORLEVEL%" == "0" (
GOTO CLUSTER_SHUTDOWN
)

```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```

rem *****
rem Check DNS
rem *****
<CLUSTERPRO インストールパス>\bin\clpazure_port_checker -h <ロードバランサーのフロントエ
ンド IP (パブリック IP アドレス)> -p <ロードバランサーの負荷分散規則 - ポート>
IF "%ERRORLEVEL%" == "0" (
GOTO EXIT
)
rem *****
rem Cluster Shutdown
rem *****
:CLUSTER_SHUTDOWN
clpdown
rem *****
rem EXIT
rem *****
:EXIT
EXIT 0

```

[タイムアウト] は clpazure_port_checker のタイムアウト値 (5 秒固定) より長く設定します。上記のサンプルスクリプトでは clpazure_port_checker を 2 回実行するため、10 秒より大きな値を推奨します。

[OK] をクリックします。

スクリプトの編集
✕

○ ユーザアプリケーション

● この製品で作成したスクリプト

ファイル preaction.bat

編集
表示
置換

タイムアウト* 5 秒

実行ユーザ ▼

OK
キャンセル
適用

7. [完了] をクリックして設定を終了します。

4. クラスタプロパティの設定

クラスタプロパティの詳細は『リファレンスガイド』-「クラスタプロパティ」を参照してください。

- クラスタプロパティ

Microsoft Azure と CLUSTERPRO の連携用に、クラスタプロパティ内の設定を以下のように設定します。

1. Cluster WebUI から設定モードへ移動し、クラスタ名のプロパティアイコンをクリックします。

クラスタ名	cluster
コメント	
言語	日本語 ▼
OK キャンセル 適用	

2. [タイムアウト] タブを選択します。ハートビートの [タイムアウト] に以下の「A + B + C」の結果を設定します。

- A : NP 解決用のマルチターゲット監視リソースで監視している監視リソースの [インターバル] × ([リトライ回数] + 1)

※ 3 つある監視リソースのうち上記計算式の結果が大きい方を選択してください。

- B : マルチターゲット監視リソースの [インターバル] × ([リトライ回数] + 1)
- C : 30 秒 (マルチターゲット監視リソースでの異常検出前にハートビートがタイムアウトしないようにするための猶予時間。適宜変更可能)

注釈: ハートビートのタイムアウト値が、NP 解決用のモニタで異常を検出する時間より短い場合、NP 解決処理が動作する前にハートビートのタイムアウトを検出します。この場合、待機サーバでサービスが起動され、クラスタ内でサービスの二重起動が発生する可能性があります。

ネットワーク初期化完了待ち時間*	3	分
同期待ち時間*	5	分
ハートビート		
インターバル*	3	秒
タイムアウト*	270	秒
内部通信タイムアウト*	180	秒
既定値		
OK キャンセル 適用		

3. [OK] をクリックします。

5. 設定の反映とクラスタの起動

1. Cluster WebUI の設定モード から、[設定の反映] をクリックします。

[設定を反映しますか。] というポップアップメッセージが表示されますので、[OK] をクリックします。

アップロードに成功すると、[反映に成功しました。] のメッセージが表示されますので、[OK] をクリックします。

アップロードに失敗した場合は、表示されるメッセージに従って操作を行ってください。

2. Cluster WebUI の ツールバーのドロップダウンメニューで [操作モード] を選択して、操作モードに切り替えます。
3. Cluster WebUI の [ステータス] タブから [クラスタ開始] をクリックし、確認画面で [開始] をクリックします。

詳細は『インストール&設定ガイド』-「クラスタを生成するには」を参照してください。

5.5 動作確認

構築した環境が正常に動作するかを、監視異常を発生させフェイルオーバーグループがフェイルオーバーすることにより確認します。

既にクラスタが正常に起動している状態からの確認手順は以下のとおりです。

1. フェイルオーバーグループ (failover1) が、現用系ノードの node-1 で起動します。Cluster WebUI [ステータス] タブにおいて failover1 が node-1 で [起動済] になっていることを確認します。
2. Cluster WebUI のプルダウンより [操作モード] から [検証モード] に変更します。
3. Cluster WebUI [ステータス] タブにおいて azureppw1 の [擬似障害発生] アイコンを選択します。
4. Azure プローブポートリソース (azurepp1) が 3 回再活性化後に、フェイルオーバーグループ (failover1) が異常になり、ノード node-2 へフェイルオーバーします。Cluster WebUI [ステータス] タブにおいて failover1 が node-2 で [起動済] になっていることを確認します。

また、Azure ロードバランサーのフロントエンド IP、ポートに対してフェイルオーバー後も正常にアクセスできることを確認します。

以上で、擬似障害の場合におけるフェイルオーバーの動作確認は完了です。その他の障害発生時の動作確認については適宜実施してください。

第 6 章

構築手順 (内部ロードバランサーを使用した HA クラスタの場合)

6.1 構築例について

本書では、Microsoft Azure において、CLUSTERPRO を使用した 2 ノードでの片方向スタンバイクラスタの構築手順を紹介します。本手順は、node-1 を現用系サーバとしたミラーディスク型の構成を対象としています。

以下の表は既定値が存在しないパラメータ、および既定値から変更したパラメータについて記載しています。

- Microsoft Azure の設定 (node-1、node-2 で共通の設定)

設定項目	設定値
リソース グループの設定	
名前	TestGroup1
リージョン	(アジア太平洋) 東日本
仮想ネットワークの設定	
名前	Vnet1
アドレス空間	10.5.0.0/24
サブネット名	Vnet1-1
サブネットアドレス範囲	10.5.0.0/24
リソース グループ名	TestGroup1
場所	(アジア太平洋) 東日本
ロードバランサーの設定	
名前	TestLoadBalancer
種類	内部
仮想ネットワーク	Vnet1
サブネット	Vnet1-1

次のページに続く

表 6.1 – 前のページからの続き

設定項目	設定値
IP アドレスの割り当て	静的
プライベート IP アドレス	10.5.0.200
リソース グループ	TestGroup1
地域	(アジア太平洋) 東日本
バックエンドプール - 名前	TestBackendPool
関連付け先	可用性セット
ターゲット仮想マシン	node-1
	node-2
ネットワーク IP 構成	10.5.0.120
	10.5.0.121
正常性プローブ - 名前	TestHealthProbe
正常性プローブ - ポート	26001
負荷分散規則 - 名前	TestLoadBalancingRule
負荷分散規則 - ポート	80(業務を提供しているポート番号)
負荷分散規則 - バックエンドポート	8080(業務を提供しているポート番号)

- Microsoft Azure の設定 (node-1、node-2 でそれぞれ設定)

設定項目	設定値	
	node-1	node-2
仮想マシンの設定		
ディスクの種類	Standard HDD	Standard HDD
ユーザー名	testlogin	testlogin
パスワード	PassWord_123	PassWord_123
リソース グループ名	TestGroup1	TestGroup1
地域	(アジア太平洋) 東日本	(アジア太平洋) 東日本
ネットワーク セキュリティ グループの設定		
名前	node-1-nsg	node-2-nsg
可用性セットの設定		
名前	AvailabilitySet-1	AvailabilitySet-1
更新ドメイン	5	5
障害ドメイン	2	2
診断ストレージアカウントの設定		
名前	自動生成	自動生成

次のページに続く

表 6.2 – 前のページからの続き

設定項目	設定値	
	node-1	node-2
パフォーマンス	Standard	Standard
レプリケーション	ローカル冗長ストレージ (LRS)	ローカル冗長ストレージ (LRS)
IP 構成の設定		
IP アドレス	10.5.0.120	10.5.0.121
ディスクの設定		
名前	node-1_DataDisk_0	node-2_DataDisk_0
ソースの種類	なし (空のディスク)	なし (空のディスク)
アカウントの種類	Standard HDD	Standard HDD
サイズ	20	20

• CLUSTERPRO の設定 (クラスタプロパティ)

設定項目	設定値	
	node-1	node-2
– クラスタ名	Cluster1	
– サーバ名	node-1	node-2
– NP 解決タブ - 種別	Ping	
– NP 解決タブ - Ping ターゲット	10.5.0.5	
– NP 解決タブ - [サーバ] 列	使用する	使用する

• CLUSTERPRO の設定 (フェイルオーバーグループ)

リソース名	設定項目	設定値
ミラーディスクリソース	リソース名	md
	詳細タブ - データパーティションのドライブ文字	G:

次のページに続く

表 6.3 – 前のページからの続き

リソース名	設定項目	設定値
	詳細タブ - クラスタパーティションのドライブ文字	F:
Azure プロープポートリソース	リソース名	azurepp1
	プローブポート	26001(正常性プローブ - ポートで指定した値)
スクリプトリソース (DSR を使用する場合)	リソース名	script1

- CLUSTERPRO の設定 (監視リソース)

監視リソース名	設定項目	設定値
ミラーディスク監視リソース	監視リソース名	mdw1
Azure プロープポート監視リソース	監視リソース名	azureppw1
	回復対象	azurepp1
Azure ロードバランス監視リソース	監視リソース名	aurelbw1
	回復対象	azurepp1

6.2 Microsoft Azure の設定

Microsoft Azure ポータル (<https://portal.azure.com/>) にログインし、6.1. 構築例について を参考に以下の設定を行います。

1. リソースグループの作成

リソースを管理するリソースグループを作成します。

2. 仮想ネットワークの作成

仮想ネットワークを作成します。

3. 仮想マシンの作成

クラスタを構成する仮想マシンの数だけ作成します。

4. プライベート IP アドレスの設定

IP アドレスは初期設定では動的割り当てとなっているため、静的割り当てに変更します。

※ネットワークインターフェイスの IP 構成から割り当てを変更します。

※変更後は新しいプライベート IP アドレスを利用できるようにするために、仮想マシンが自動的に再起動されます。

5. ロードバランサーの作成

1. ロードバランサーを作成します。詳細は以下の Web サイトを参照してください。

- Load Balancer のドキュメント:

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/azure/load-balancer/>

※ ロードバランサーの種類は [内部] を選択し作成します。

※ デプロイには数分掛かります。

2. 仮想マシンをバックエンドプールに紐付けます。

3. 正常性プローブを設定します。

4. 負荷分散規則を設定します。

[ポート]、[バックエンドポート] を設定し、[OK] を選択します。

DSR を使用する場合は、[ポート] と [バックエンドポート] に同一のポート番号を設定、[フローティング IP(Direct Server Return)] を有効に設定し、[OK] を選択します。その際指定するポート番号は、業務を提供するアプリケーションへの接続に使用するポート番号を指定します (例.80)。

DSR 構成を作成する場合は以下の CLUSTERPRO オフィシャルブログを参照してください。

<https://jpn.nec.com/clusterpro/blog/20181031.html>

6.3 インスタンスの設定

以下の手順で設定します。

OS の日本語化が必要な場合、以下を参照してください。

https://blogs.technet.microsoft.com/jpaztech/2017/12/21/japanese_langpack_etc/

1. ミラーディスクの準備

ミラーディスクリソース用のパーティションを設定します。

ミラーディスクリソース用のパーティションについては、『インストール&設定ガイド』 - 「システム構成を決定する」 - 「ハードウェア構成後の設定」 - 「2. ミラー用パーティションを設定する (ミラーディスク使用時は必須)」を参照してください。

DSR を使用する場合、クラスタを構成する各ノードにおいてループバックアダプタを追加します。

DSR 構成を作成する場合は以下の CLUSTERPRO オフィシャルブログを参照してください。

<https://jpn.nec.com/clusterpro/blog/20181031.html>

2. OS 起動時間の調整、ネットワーク設定の確認、ファイアウォールの設定を確認、サーバの時刻を同期、パワーセービング機能をオフ

各手順は『インストール&設定ガイド』 - 「システム構成を決定する」 - 「ハードウェア構成後の設定」を参照してください。

3. CLUSTERPRO のインストール

インストール手順は『インストール&設定ガイド』を参照してください。

インストール完了後、OS の再起動を行ってください。

4. CLUSTERPRO のライセンスを登録

ライセンス登録手順は『インストール&設定ガイド』を参照してください。

6.4 CLUSTERPRO の設定

Cluster WebUI のセットアップ、および接続方法は『インストール&設定ガイド』-「クラスタ構成情報を作成する」を参照してください。

以下のリソース/監視リソースを追加する手順を記述します。

- ミラーディスクリソース
- Azure プローブポートリソース
- Azure プローブポート監視リソース
- Azure ロードバランス監視リソース
- PING ネットワークパーティション解決リソース (NP 解決用)

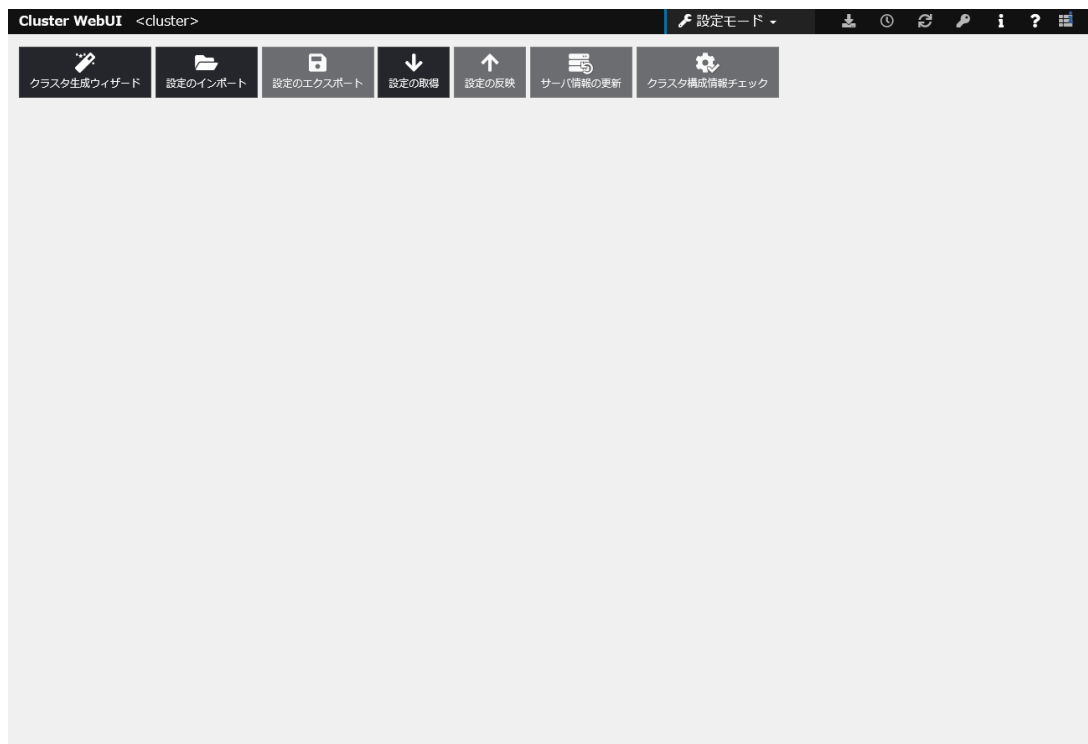
上記以外の設定は、『インストール&設定ガイド』、『リファレンスガイド』を参照してください。

1. クラスタの作成

最初に、クラスタ生成ウィザードを開始し、クラスタを構築します。

- クラスタの構築

1. Cluster WebUI にアクセスし、[クラスタ生成ウィザード] をクリックします。



2. [クラスタ生成ウィザード] 画面の [クラスタ] 画面が表示されます。

[クラスタ名] に任意のクラスタ名を入力します。

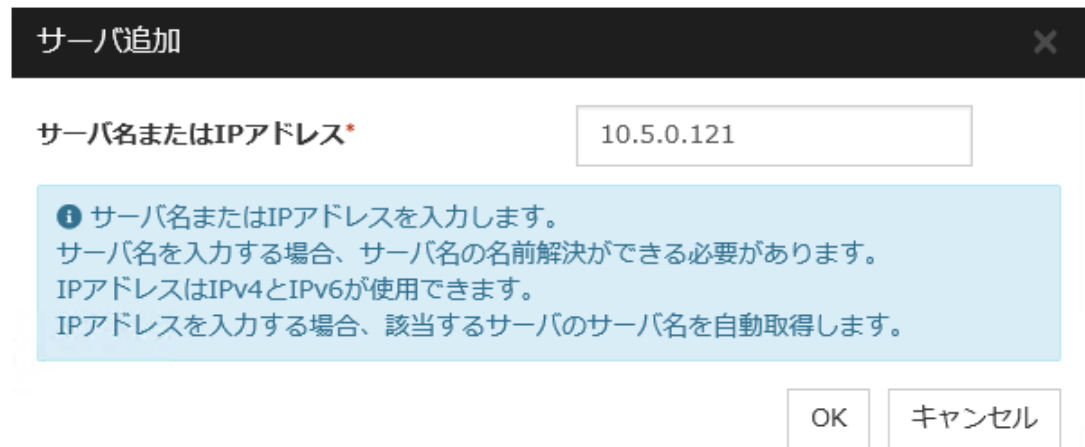
[言語] を適切に選択します。[次へ] をクリックします。



3. [基本設定] 画面が表示されます。

Cluster WebUI に接続したインスタンスがマスタサーバとして登録済みの状態で表示されます。

[追加] をクリックし、残りのインスタンスを追加します (インスタンスの Private IP アドレスを指定します)。[次へ] をクリックします。





4. [インタコネクト] 画面が表示されます。

インタコネクトのために使用する IP アドレス (各インスタンスの Private IP アドレス) を指定します。また、後で作成するミラーディスクリソースの通信経路として [MDC] に mdc1 を選択します。[次へ] をクリックします。



5. [NP 解決] 画面が表示されます。

PING 方式の NP 解決を行う場合、[追加] をクリックして [NP 解決一覧] に行を追加します。[種別] 列のセルをクリックし、[Ping] を選択します。Ping ターゲット列のセルをクリックして Ping を送信する対象となる機器の IP アドレスを設定します。IP アドレスは、Microsoft Azure の仮想ネットワーク内部に存在するクラスタサーバ以外のサーバを設定して下さい。各サーバ列のセルをクリックして [使用する] [使用しない] を設定します。[次へ] をクリックします。



2. グループリソースの追加

• グループの定義

フェイルオーバーグループを作成します。

1. [グループ一覧] 画面が表示されます。

[追加] をクリックします。



2. [グループの定義] 画面が表示されます。

[名前] にフェイルオーバーグループ名 (failover1) を設定します。[次へ] をクリックします。

グループの定義

failover X

基本設定 → 起動可能サーバ → グループ属性 → グループリソース

タイプ*

フェイルオーバー▼

サーバグループ設定を使用する☐

名前*

failover1

コメント

① グループのタイプを選択します。
仮想マシンリソースを使用して仮想マシンをクラスタ化する場合、タイプは「仮想マシン」を選択します。それ以外の場合は「フェイルオーバー」を選択します。
サーバグループを使用する場合、「サーバグループ設定を使用する」チェックボックスをオンにします。

戻る

次へ▶

キャンセル

3. [起動可能サーバ] 画面が表示されます。

何も指定せず [次へ] をクリックします。

4. [グループ属性] 画面が表示されます。

何も指定せず [次へ] をクリックします。

5. [グループリソース一覧] 画面が表示されます。

以降の手順で、この画面でグループリソースを追加していきます。

グループの定義

failover X

基本設定 ✓ → 起動可能サーバ ✓ → グループ属性 ✓ → グループリソース

プロパティ

追加

削除

グループリソース一覧

名前	タイプ
リソースはありません	

① 「追加」 ボタンを押して、リソースを追加します。
「プロパティ」 ボタンで選択したリソースのプロパティを設定します。

戻る

完了

キャンセル

- ミラーディスクリソース

ミラーディスクリソースを作成します。

詳細は『リファレンスガイド』-「ミラーディスクリソースを理解する」を参照してください。

1. [グループリソース一覧] で [追加] をクリックします。

2. [グループのリソース定義 | failover1] 画面が開きます。

[タイプ] ボックスでグループリソースのタイプ (ミラーディスクリソース) を選択し、[名前] ボックスにグループ名 (md) を入力します。[次へ] をクリックします。

3. [依存関係] 画面が表示されます。
何も指定せず [次へ] をクリックします。
4. [復旧動作] 画面が表示されます。[次へ] をクリックします。
5. [詳細] 画面が表示されます。
[起動可能サーバ] で [名前] 列中のサーバ名を選択し [追加] をクリックします。

6. [パーティションの選択] ダイアログボックスが表示されます。[接続] をクリックし、「5. 仮想マシンの設定」で作成したデータパーティションと、クラスタパーティションを選択し、[OK] をクリックし

ます。

パーティションの選択

情報取得

接続

データパーティション

ボリューム	ディスク番号	パーティション番号	サイズ	GUID
	0	1	500MB	
D:¥	1	1	10238MB	
F:¥	2	1	1024MB	
C:¥	0	2	129546MB	
G:¥	2	2	19453MB	

クラスタパーティション

ボリューム	ディスク番号	パーティション番号	サイズ	GUID
	0	1	500MB	
D:¥	1	1	10238MB	
F:¥	2	1	1024MB	
C:¥	0	2	129546MB	
G:¥	2	2	19453MB	

OK

キャンセル

7. node-1 について 5 と 6 を設定、次に node-2 について 5 と 6 を設定し、[完了] をクリックします。

グループのリソース定義 | failover1
md

情報 ✓ → 依存関係 ✓ → 復旧動作 ✓ → 詳細

ミラーディスク番号*

1 ▼

データパーティションのドライブ文字*

G:

クラスタパーティションのドライブ文字*

F:

クラスタパーティションのオフセットインデックス*

0 ▼

ミラーディスクコネク

選択

起動可能サーバ

名前	データパーティション	クラスタパーティション		名前
node-1			← 追加 → 削除	
node-2				

編集

調整

戻る

完了

キャンセル

- Azure プローブポートリソース

Microsoft Azure 上で CLUSTERPRO を利用する場合、業務が稼働するノードの特定のポートでロードバランサーからの死活監視を待ち受ける仕組みを提供します。

Azure プローブポートリソースの詳細は『リファレンスガイド』-「Azure プローブポートリソースを理解する」を参照してください。

1. [グループリソース一覧] で [追加] をクリックします。
2. [グループのリソース定義 | failover1] 画面が開きます。[タイプ] ボックスでグループリソースのタイプ (Azure プローブポートリソース) を選択して、[名前] ボックスにグループ名 (azurepp1) を入力します。[次へ] をクリックします。

グループのリソース定義 | failover1 azurepp ✕

情報 → 依存関係 → 復旧動作 → 詳細

タイプ Azureプローブポートリソース ▼

名前 azurepp1

コメント

ライセンス情報取得

① グループリソースの種類を選択して名前を入力してください。

戻る 次へ キャンセル

3. [依存関係] 画面が表示されます。何も指定せず [次へ] をクリックします。
4. [復旧動作] 画面が表示されます。[次へ] をクリックします。
5. [プローブポート] にロードバランサーの設定 (正常性プローブの設定) 時に [ポート] として指定した値を入力します。

グループのリソース定義 | failover1 azurepp ✕

情報 ✓ → 依存関係 ✓ → 復旧動作 ✓ → 詳細

プローブポート 26001

調整

戻る 完了 キャンセル

6. [完了] をクリックします。
- スクリプトリソース (DSR を使用する場合)

スクリプトリソースを追加することにより、ロードバランサーの切り替えに合わせて、ループバックアダプタにフロントエンド IP アドレスを追加/削除する仕組みを提供します。

スクリプトリソースの詳細は『リファレンスガイド』-「スクリプトリソースを理解する」を参照してください。

1. [グループリソース一覧] で [追加] をクリックします。
2. [グループのリソース定義 | failover1] 画面が開きます。[タイプ] ボックスでグループリソースのタイプ (スクリプトリソース) を選択して、[名前] ボックスにグループ名 (script1) を入力します。
3. [次へ] をクリックします。
4. [依存関係] 画面が表示されます。何も指定せず [次へ] をクリックします。

5. [復旧動作] 画面が表示されます。[次へ] をクリックします。

6. start.bat、stop.bat を選択し、[編集] をクリックします。スクリプトは CLUSTERPRO オフィシャルブログ (<https://jpn.nec.com/clusterpro/blog/20181031.html>) を参考に設定してください。CLUSTERPRO オフィシャルブログに掲載のスクリプトはサンプルです。環境に合わせてカスタマイズしてください。

7. [完了] をクリックします。

3. 監視リソースの追加

- Azure プローブポート監視リソース

Microsoft Azure プローブポートリソースが起動しているノードに対して、死活監視のためのポートの監視機構を提供します。

Azure プローブポート監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「Azure プローブポート監視リソースを理解する」を参照してください。

Azure プローブポートリソースを 1 つ追加すると、Azure プローブポート監視リソースが 1 つ自動的に作成されます。

- Azure ロードバランス監視リソース

Microsoft Azure プローブポートリソースが起動していないノードに対して、プローブポートと同じポート番号が開放されていないかの監視機構を提供します。

Azure ロードバランス監視リソースの詳細は『リファレンスガイド』-「Azure ロードバランス監視リソースを理解する」を参照してください。

Azure プローブポートリソースを 1 つ追加すると、Azure ロードバランス監視リソースが 1 つ自動的に作成されます。

4. 設定の反映とクラスタの起動

1. Cluster WebUI の設定モード から、[設定の反映] をクリックします。

[設定を反映しますか。] というポップアップメッセージが表示されますので、[OK] をクリックします。

アップロードに成功すると、[反映に成功しました。] のメッセージが表示されますので、[OK] をクリックします。

アップロードに失敗した場合は、表示されるメッセージに従って操作を行ってください。

2. Cluster WebUI の ツールバーのドロップダウンメニューで [操作モード] を選択して、操作モードに切り替えます。

3. Cluster WebUI の [ステータス] タブから [クラスタ開始] をクリックし、確認画面で [開始] をクリックします。

詳細は『インストール&設定ガイド』-「クラスタを生成するには」を参照してください。

6.5 動作確認

構築した環境が正常に動作するかを、監視異常 (擬似) を発生させフェイルオーバーグループがフェイルオーバーすることにより確認します。

既にクラスタが正常に起動している状態からの確認手順は以下のとおりです。

1. フェイルオーバーグループ (failover1) が、現用系ノードの node-1 で起動します。Cluster WebUI [ステータス] タブにおいて failover1 が node-1 で [起動済] になっていることを確認します。

DSR を使用する場合は、パケットキャプチャを実施し、クライアントの IP アドレスとロードバランサーのフロントエンド IP アドレスで通信が行われていることもあわせて確認します。

2. Cluster WebUI のプルダウンより [操作モード] から [検証モード] に変更します。

3. Cluster WebUI [ステータス] タブにおいて azureppw1 の [擬似障害発生] アイコンを選択します。

4. Azure プローブポートリソース (azurepp1) が 3 回再活性化後に、フェイルオーバーグループ (failover1) が異常になり、ノード node-2 へフェイルオーバーします。Cluster WebUI [ステータス] タブにおいて failover1 が node-2 で [起動済] になっていることを確認します。

また、Azure ロードバランサーのフロントエンド IP、ポートに対してフェイルオーバー後も正常にアクセスできることを確認します。

DSR を使用する場合は、パケットキャプチャを実施し、クライアントの IP アドレスとロードバランサーのフロントエンド IP アドレスで通信が行われていることもあわせて確認します。

以上で、擬似障害の場合におけるフェイルオーバーの動作確認は完了です。その他の障害発生時の動作確認については適宜実施してください。

DSR 構成を作成する場合は以下の CLUSTERPRO オフィシャルブログを参照してください。

<https://jpn.nec.com/clusterpro/blog/20181031.html>

第 7 章

エラーメッセージ一覧

各リソース/モニタリソースのエラーメッセージについては、以下のマニュアルを参照してください。

- 『リファレンスガイド』 - 「エラーメッセージ一覧」

第 8 章

注意事項

以下のマニュアルを参照してください。

- 『スタートアップガイド』 - 「注意制限事項」 - 「CLUSTERPRO インストール前」 - 「通信ポート番号」

Azure DNS を使用した HA クラスタの場合

- 『スタートアップガイド』 - 「注意制限事項」 - 「CLUSTERPRO インストール前」 - 「Azure DNS リソースについて」
- 『スタートアップガイド』 - 「注意制限事項」 - 「CLUSTERPRO の構成情報作成時」 - 「Azure DNS リソースの設定について」
- 『リファレンスガイド』 - 「Azure DNS リソースに関する注意事項」
- 『リファレンスガイド』 - 「Azure DNS 監視リソースの注意事項」

ロードバランサーを使用した HA クラスタの場合

- 『スタートアップガイド』 - 「注意制限事項」 - 「CLUSTERPRO の構成情報作成時」 - 「Azure プローブポートリソースの設定について」
- 『スタートアップガイド』 - 「注意制限事項」 - 「CLUSTERPRO の構成情報作成時」 - 「Azure ロードバランス監視リソースの設定について」
- 『リファレンスガイド』 - 「Azure プローブポートリソースに関する注意事項」
- 『リファレンスガイド』 - 「Azure プローブポート監視リソースの注意事項」
- 『リファレンスガイド』 - 「Azure ロードバランス監視リソースの注意事項」

Azure のメモリ保持メンテナンス

Azure のメモリ保持メンテナンスにより、仮想マシンは最大で 30 秒間一時停止状態になる場合があります。メモリ保持メンテナンスについての詳細は以下を参照してください。

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/azure/virtual-machines/windows/maintenance-and-updates>

[クラスタプロパティ]-[タイムアウト] タブ-[ハートビートタイムアウト] はメモリ保持メンテナンスを考慮した値を設定してください。

また、[ハートビートタイムアウト] と併せて以下も調整してください。

- OS の起動時間は [ハートビートタイムアウト] より長くなるよう調整してください。

以下のマニュアルも参照してください。

- 『リファレンスガイド』 - 「クラスタプロパティ」 - 「タイムアウトタブ」
- 『スタートアップガイド』 - 「注意制限事項」 - 「CLUSTERPRO インストール前」 - 「OS 起動時間の調整」

Azure DNS を使用する場合の注意事項

CLUSTERPRO が Microsoft Azure と連携するためには、Microsoft Azure の組織アカウントが必要となります。

組織アカウント以外のアカウントは Azure CLI 実行時に対話形式でのログインが必要となるため使用できません。

第 9 章

免責・法的通知

9.1 免責事項

- 本書の内容は、予告なしに変更されることがあります。
- 日本電気株式会社は、本書の技術的もしくは編集上の間違い、欠落について、一切責任をおいせん。また、お客様が期待される効果を得るために、本書に従った導入、使用および使用効果につきましては、お客様の責任とさせていただきます。
- 本書に記載されている内容の著作権は、日本電気株式会社に帰属します。本書の内容の一部または全部を日本電気株式会社の許諾なしに複製、改変、および翻訳することは禁止されています。

9.2 商標情報

- CLUSTERPRO® は、日本電気株式会社の登録商標です。
- Microsoft、Windows、Azure、Azure DNS は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。
- 本書に記載されたその他の製品名および標語は、各社の商標または登録商標です。

第 10 章

改版履歴

版数	改版日付	内容
1	2022/04/08	新規作成
2	2022/07/29	誤記修正
3	2023/02/17	誤記修正

© Copyright NEC Corporation 2022. All rights reserved.